

琉球大学学術リポジトリ

日本における方言学と言語地理学

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2012-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上村, 幸雄, Uemura, Yukio メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/24914 |

日本における方言学と言語地理学

Dialectology and Linguistic Geography in Japan

沖縄言語研究センター (OCLS) 代表
琉球大学名誉教授 国立国語研究所名誉所員

上 村 幸 雄

要旨

筆者がこれまでに係わった日本の方言学と言語地理学について概観する。

I 前史（明治以降、1948年末の国立国語研究所設立まで）

II 国立国語研究所設立以後（1948～）

III 沖縄言語研究センター（OCLS）設立以降（1978～2011）

IV 現代当面する諸問題

I 前史（明治以降、1948年の国立国語研究所設立まで）

これは、1929年に生まれて、1952年5月に国立国語研究所に就職した筆者にとっては、その多くがそのあとで文献によって知りえた知識である。ここには、注目すべき事項名だけを列挙するにとどめる。

(1) 明治時代の全国方言調査

国語調査委員会「音韻調査報告書」、「音韻分布図」（1905日本書籍）

政府が各府県庁に通達して一定の項目について担当地域の方言を報告させたものであり、日本における言語地理学的調査の先駆けをなす。その報告書は以下の通りである。

国語調査委員会「口語法調査報告書（上・下）」、付図「口語法分布図」

(1906文部省)

(2) 大正期と昭和期の前半

重要な刊行物として次の2点を挙げておく。

雑誌「方言」1-8巻（創刊～終刊：1931～1938春陽堂）

東条操・金田一春彦共著「方言採集手帳」（1950刀江書院）

(3) 日本の民俗学の創始者としての柳田國男（1875～1962）と方言学

柳田は「蝸牛考」（初版1930刀江書院、再版1980岩波書店）で方言周圏論を展開したが、柳田のこの理論がヨーロッパの比較言語学におけるインド・ヨーロッパ諸語相互間の方言周圏論（波状伝搬説）の影響を受けていたのかどうかは、筆者には不明である。

(4) 東条操（1884～1966）と方言学

①東条操の方言区画論

東条は、日本で国語学の中に方言学を位置づけた最初研究者であるが、全国の方言を地域ごとの区画に分ける方言区画論を展開した。そして東条のこの区画説に続くものとしては、金田一春彦、都竹通年男、奥村三雄、平山輝男らの区画説がある。

これら諸家の区画説に関しては、大石初太郎・上村幸雄編「方言と標準語」（1975筑摩書房）、あるいは「講座方言学」の第1巻「方言概説」（1986国書刊行会）所収の上村幸雄「日本語方言の概説」などに、筆者による紹介がある。

②「全国方言辞典」（1951東京堂）と「方言分類辞典：標準語引」（1954東京堂）

日本語を対象にした最初の全国規模の方言辞典である。ちなみにその後は東条の学習院大学での教え子であった徳川宗賢が監修した「日本方言大辞典（全3巻）」（1989小学館）が日本で最大で、かつすぐれた方言辞典となったが、その成果は、同じ小学館の「日本国語大辞典（別巻を含めて全14巻）」の第2版（2002）に取り込まれている。

そしてこの「日本国語大辞典」第2版は日本で最大で、かつすぐれた日本語

の辞典であることに間違いない。筆者の見るところ、世界に誇っていい辞典であると断定して差支えない水準に達している。

ちなみに、筆者は現在進めている日本語の形成についての研究において、アイヌ語・琉球語に関するこれまでの諸家の多くの研究文献から受けた恩恵と並んで、この「日本国語大辞典」から非常に大きな恩恵を受け続けている。

なお、その後に刊行されたおおきな方言辞典には、平山輝男ほか編のもの（明治書院1997～）がある。

(5) 伊波普猷の琉球語研究

伊波普猷（1876～1947）は沖縄研究全般の開拓者であるが、その言語の研究においても先駆者であった。筆者は自分の琉球語研究の過程で、かれの琉球語研究のうち、とりわけ次の2著から大きな恩恵を受けた。

- ①「校注琉球戯曲集」（1929春陽堂）、伊波普猷全集、全11巻中の第3巻）
（1974平凡社）に再録
- ②「琉球戯曲辞典」（1938郷土研究社）、おなじく伊波普猷全集の第8巻）
（1975平凡社）に再録

Ⅱ 国立国語研究所の設立（1948）以降

(1) 国立国語研究所の設立と評議委員会

① 国立国語研究所の設立と場所の移動

国立国語研究所は、最初はJR千駄ヶ谷駅の近くの明治天皇記念絵画館1階の一部を間借りして発足し、1954年、神田の一ツ橋の一ツ橋講堂の裏手の古い木造2階建てに移り、さらに1962年に北区西が丘の旧陸軍兵器廠の広大な敷地の中の一隅にあった管理棟、鉄筋2階建てへと移り、そこで増築を繰り返した。そして今世紀に入って、2005年、立川にあって戦後米軍に接收された広大な軍用飛行場のあとの敷地の一部に、ようやく自らの庁舎として、立派な4階建ての建物を新築して、そこに移ることができ、現在に至った。

ちなみに、私事に亘るが、筆者は、1959年に、没落によって、東京都世田谷

区成城町にあった広い敷地の旧宅を処分し、府中市内の狭い敷地に新居を構えたが、1976年からは、沖縄県浦添市に居住した。その後2003年以降、一時島根県出雲市近くの斐川町所有のあかつきハウスを無料で借りて居住したが、2004年春に心臓病のために東京府中の病院に二月ほど入院した。そして退院以降は、冬の間は暖かい沖縄の浦添で、残りは東京の府中で過ごすという生活を繰り返して、弱った心臓をかばいつつ、何とか現在にまで至っている。そして府中市に住んで月一回の府中病院への通院以外は出不精の筆者にとって幸いなことに、国立国語研究所が立川市へ移転してきたので、1976年までの筆者の勤め先であった国立国語研究所が、初めて自宅に近くて便利な場所にやってきたのだった。

②国立国語研究所の評議委員会

かつての評議委員会は学者有識者からなる国立国語研究所への諮問機関であった。なお、今の国立国語研究所には、それに正確に該当する組織はない。

初代の評議委員会の議長は柳田國男であった。また、評議員の一人には服部四郎（1908～1995）がいた。お二人とも、筆者が国立国語研究所で行なった研究に深い係わりのある方々であった。

柳田國男邸は小田急成城学園前駅の北側にあって、筆者も駅の南側にずっと住んでいたので、国立国語研究所から用事を頼まれて柳田邸を訪れたことがあり、玄関でお目にかかった。筆者が単独で柳田國男にお目に掛かれたのはこの一回だけである。しかし何の用事であったかは思い出せない。柳田國男の没後、その蔵書は筆者の母校である成城学園の図書館に寄贈された。

服部四郎については「沖縄語辞典」の項の末尾で詳しく述べる。

③国立国語研究所の地方調査員（のち地方研究員と改称）の制度

その設置は1949年であり、その運営と研究の委嘱には地方言語研究室が当たった。地方言語研究室は、もと第6研究室という名で、第1研究室（のちに話しことば研究室と改称）から分離されてできた研究室である。柴田武（1819～2007）が初代の室長であった。

地方調査員は原則各県ひとりずつで、例外的に、兵庫県に2人、そして北海

道には3人置かれていた。沖縄県は、日本復帰以前から仲宗根政善が担当していたが、琉球語の重要性という観点から、のち、数名に増加した。地方調査員には、地方在住の方言学専門の研究者に加えて、方言に関心のある国語学の研究者が委嘱された。しかし、日本語方言学上、飛び抜けて重要な八丈島方言の担当者がいないなど、地方調査員配置上の欠点もいくつかあった。

④国立国語研究所の統計学的な言語社会学的研究

国立国語研究所は、長期にわたって多くの統計学的な言語社会学的研究を行っている。

その言語社会学的調査の主な地点名は、東京都八丈島、福島県白河市、山形県鶴岡市、三重県伊賀上野市、愛知県岡崎市、島根県松江市などである。ちなみに、筆者は、国立国語研究所に入所した直後に、三重県伊賀上野市（1952）、愛知県岡崎市（1953）の調査に参加して、統計学的な言語社会学的研究を体験した。このときの調査には、国立国語研究所の柴田武、北村甫、野元菊雄、山内り、そして筆者のほか、研究所から高崎短期大学へ転出したばかりの島崎稔、国立統計数理研究所から林知己夫、西平重喜、国立教育研究所から島津一夫らが加わっている。ちなみに筆者は島崎稔のあとの空席を埋めるために国立国語研究所に採用されたのだった。

もともと、これらの統計学的な言語社会的研究は、アメリカの占領軍の指示によって行われた「日本人の読み書き能力」でとられた社会調査の方法を、それに参加した柴田武ら上述の研究者らが模倣して、国立国語研究所の研究計画の中に持ち込んだものである。当時、社会学的な調査研究の方法に疎かった国立国語研究所の研究者たちは、その方法を新しい言語研究の方法と見做して、繰り返しこの統計学的手段を使った研究調査を行ったのであった。

日本の都市を対象にしたこの統計学的な言語社会的研究は、研究者の人員と費用を要する割には、得られる新しい知見が少ない。そしてその得られる知見も、常識的に予見できる事柄が大部分を占める。したがって、研究自体の社会的貢献度は小さく、研究者の仲間うちの自己満足に終わってしまいがちなのである。

その理由は、調査地点の言語の構造、とくに方言の構造の把握が不十分で体系性を欠いたまま、主としてサンプリングによって選出された一般市民への訪問面接調査、あるいは一か所に集めて、スライドの上映などによってそれに対する反応を調査するといった方法で、調査が推し進められたからである。たとえば、「この表現は、これこれの場合、適切であると思うか？」のような質問を被調査者に発し、その反応をあらかじめ選択肢の付いた調査票に調査者が分類して記入するといった具合である。

筆者から見ると、統計学的手法を使うにせよ、使わないにせよ、このような言語社会学的調査を行うのであれば、社会学的に必要な、そして調査研究結果の有効性の高い研究テーマが他にいくつもあったはずである。たとえば、在日中国人や在日韓国朝鮮人の言語の問題、そしてそれとは別の、占領して駐留するアメリカ軍との言語の問題、在日する「外国人」「外人」などと呼ばれる欧米人との言語の問題、あるいは、日本各地に分布する、いわゆる「特殊部落」の住民として差別され続けて来た人々と、一般人とのコミュニケーションの問題、日本人の外国語習得とその長い歴史と変遷の問題、さらには、かつて塾学校・盲学校と呼ばれた「特殊教育」の中の教育の内容と方法の問題などである。学校教育の中での漢字の教育と習得の問題という極めて大きな、日本固有の問題もそれに含まれる。国立国語研究所がこれらの研究テーマを故意に避けてきたのかどうか、国立国語研究所が将来これらの問題にどう対処すべきなのか、あるいは対処すべきではないと考えて来たのか、一つ一つについて検証してみ必要がある。

個々の研究がどのようにして社会に寄与するのかという問題は、なにも言語社会学研究だけに限った問題ではないので、ここでは国立国語研究所の研究事業全体の有り方の問題についても、以下に筆者の見解を述べて置こう。

いま一つ、国立国語研究所の行った非効率的な大規模な研究には「現代雑誌90種の用字・用語」(3分冊1962~64)をはじめとする、単語と複合語の構成要素(研究所内部で α 単位と称したもの)についての、大規模で、かつ長期間を掛けた統計学的研究がある。この研究は岩淵悦太郎の支持を得て、書きことば研究室の水谷静夫らの室員が大勢の臨時筆生と呼ばれた常勤の研究補助員を使

用しながら行った研究で、のち、初めて国立国語研究所に導入された初期の電子計算機を駆使して行った研究であったが、筆者の見るところ、語彙論と文字論の基礎的な研究を伴っていなかったため、その成果は、統計学的な言語社会学的研究と同様に、言語学的研究としては貧相な結果しかもたらさなかったと言わざるを得ない。

研究者集団によるこうした社会的貢献度の少ない研究が、文部省の科学研究費補助金を得て大々的に進められることは、この国にしばしば見られる現象の一つであるが、しかし、そのために、優れた研究者が行いたいと考える研究、あるいはまた、社会的必要度の高い研究、また、広い分野の応用的で実用的な研究の実行に必要な、基礎的内容の研究に予算が回らないという結果が生じやすい。この場合、広い視野の、優れた指導的な研究者の不在という事情が伴っているのが普通であるが、国立国語研究所の場合もその例に漏れなかった。

国立国語研究所の例でいえば、音韻論、文字論、文法論、語彙論、記述的方言学、史的言語学などという基礎的分野の研究や、また、国語教育の研究、言語問題・文字問題、言語政策の問題研究など、社会の現実と直面した課題についての大切な研究分野に研究者の不足が生じたり、研究方法の進歩に遅れが生じたりして、研究が大きく飛躍的に進歩するなどといったことが起こらなくなる。これは研究者の数の多さ、予算の大きさとは関係なく起こる現象であるが。

筆者の目から見ると、このような傾向は、国立国語研究所の発足当時から生じており、そのような傾向は、残念ながら設立から60余年を経た現在にまで引き継がれているように見える。そしてそれが母国語研究のための唯一の国立の機関としての国立国語研究所の存在価値を大きく引き下げる結果を生んでいる。

その結果、国立国語研究所は、専門的な言語研究者にとっても、また国民全体にとっても、さして役に立たない、あってもなくてもいい研究機関に成り下がるという状態を生んでいるのである。そして出される研究報告は、専門家から見ても、また一般読者から見ても、読んでも役に立たず、分厚な、見かけ倒しの、退屈な研究報告になってしまう。読みたい、読ませたいと思う良書は、この国に山のようにあるにも拘らず、である。

ちなみに、国立国語研究所の設立された際の設置法では、大型の国語の辞書

の編纂が義務付けられてきたのであるが、岩渕悦太郎以下、歴代の所長はこれを嫌がり、様々な口実を設けて、これを先延ばしにしてきた。そしてついに、設置法から辞書作成を義務付ける条文を外してしまうことに成功した。これには、限られた予算と人員で、そして言語研究の専門家のいない監督官庁の文化庁や文部省の下で、規模の大きい国語辞典を編集するには困難があり過ぎることが分かっていたからでもあった。しかしその一方で、初代所長の西尾実と2代目岩渕悦太郎の監修した「岩波国語辞典」（初版1963）や、三省堂の「新明解国語辞典」（初版1972）のように、研究者個人の収入になる商業的な小型辞典の編纂には、副収入がなくても、研究者に家族の生計が成り立つ時代に入ってから、国立国語研究所の多くの研究者が関与しているのである。さいわい小学館の「日本国語大辞典」（2版2001、初版は1971）が出現したおかげで、国民も、国立国語研究所も、ともに救われたと言える状態になったのであるが。

1952年以来、長く国立国語研究所に勤務し、1976年に琉球大学へ転じて以後も、さまざまに国立国語研究所と関係を持ち続けてきた筆者は、常々、国立国語研究所の研究事業のありようについて、おおよそ上述のように感じて来た。しかしその一方で、国立国語研究所の行った研究の中には、優れたものもいくつかあることも、ここでは是非指摘しておきたい。その代表的な例をいくつか挙げておこう。

林大（初代の書きことば研究室長で、第三代目の研究所長）の行った語彙の意味分析による「分類語彙表」（1964、その改訂増補版2003）、永野賢の「現代語の助詞・助動詞"用法と実例"」（国立国語研究所報告3、1951）、宮島達夫「動詞の意味・用法の記述的研究」（1972）、おなじく西尾寅弥「形容詞の意味・用法の記述的研究」（1972）などなどである。いずれも将来に大きく発展する可能性のある研究であるが、うち永野の研究は、研究所の外の民間の研究組織である言語学研究会の指導者、奥田靖雄の一連の連語論研究の論文（1960,61,67むぎ書房、「追悼 奥田靖雄」（2003むぎ書房）所収の「奥田靖雄著作目録」を参照）で飛躍的な発展を遂げた。

また、筆者と高田正治の実験音声学的な研究「X線映画資料による母音の発音の研究—フォネーム研究序説—」（国立国語研究所報告60、1978）、「日本語

の・母音・子音・音節—調音運動の実験音声学的研究—」（国立国語研究所報告100, 1990）もすぐれた研究の例に加えてよいであろう。ちなみに、この2著のうち前者は、恩師の服部四郎が東京言語学研究所での公開講義で「これは世界的な研究です」と言ってテキストに使って下さったことを、その講義の聴講者で筆者が1989年、非常勤講師として行った琉球語に関する講義に出席された方と、ご子息の服部旦さんのお二人から聞いて、後で知ることができた。

⑤国立国語研究所編「沖縄語辞典」（1963大蔵省印刷局）の編集と刊行

これについては、これに深く係った筆者として、是非述べて置きたいと考えることがいくつかある。

まず、この本の「編集経過の概要」（p.1~p.7）の冒頭に太字で印刷されたつぎの文は、この辞典の編集担当者であった筆者の執筆であるが、その初校の校正刷りの段階で、筆者が書いた原文を直接の上司であった柴田武の指示に従って、以下のように修正することを余儀なくされた。そしてその下に掲げたものが筆者の原文であった。

この辞典は島袋盛敏氏が収集した資料をもとにしている。

この辞典は島袋盛敏氏が執筆した原稿をもとにしている。

原文のままだと、国立国語研究所の行った編集の仕事が小さくなり過ぎるというのが修正した理由であったが、原著者である島袋盛敏(1890~1970)にながく接しながら、編集作業を全面的に担当した筆者としては、この修正は大変不満であった。

島袋盛敏は、かつての琉球王国の首都であった首里の旧士族としての高い教養をもち、沖縄における漢文学にも、また沖縄の芸能にも非常によく通じた方であり、かつ、自らも琉歌と組踊りに精通して、それをそらんじて詠じたり、また、新しい琉歌を創作したりすることも楽しんでいた。筆者は、たびたび横浜市保土ヶ谷にあったご自宅に伺って、首里方言の単語についての質問を続けたのであったが、島袋氏がご健康にもすぐれぬことをよく知っていた筆者としては、図らずも10年間もかかってしまった編集の成果を、無事に出版にまで漕ぎ着けることが何より大切だと考えざるを得なかったので、上司との妥協を

容認せざるを得なかった。そしてまた、この本が国立国語研究所編となっていて、原著者の名前が本の背表紙にのっていないことにも筆者は大いに不満であり、かつ原著者島袋盛敏へも、ご自分の研究の時間を割いて、長年編集に協力いただいた歴史学者、比嘉春潮先生(1883~1977)へも申し訳ない気持ちであった。しかし「沖縄語辞典」が出版されたとき、筆者は自分のこうした不甲斐なさを思っ、大変憂鬱であった。出来上がった本を焼き捨ててしまいたいなどと口走って服部先生を驚かせたこともあった。しかし筆者はこんな話を誰にもしていない。ここで初めて語るのである。

また当時、筆者は国立国語研究所の筆者の上司たちとも、この仕事を含め、研究の方法やその運営についての意見の相違が大きかった。そして国立国語研究所に職員組合を作っ、その当時の所長、岩淵悦太郎らと対立・衝突することもしばしばであった。国立国語研究所の研究体制を改革するための委員会をつくっ、討議を重ね、改革案を文書にしたこともあったが、岩淵所長以下、管理職に就いていた研究者とも対立して、筆者の努力は徒勞に終わった。その文書は筆者が現在手元に保存しているが、改革のためのこうした経緯は、公刊された国立国語研究所の報告のどこにも記されていない。

また、この本が大蔵省印刷局から出版されたのも、研究所に出版の費用を負担する余力がなく、また、その当時の沖縄は、祖国復帰闘争や、沖縄の日本復帰、そして観光地として人々の注目を集めるはるか以前であったために、「沖縄語辞典」の出版を、採算の点から民間の大手出版社に引受先を見出すことが難しいという状態にあった。そのために、ページ数も筆者が必要不可欠と判断したものの範囲に止めざるを得ず、また見出し語には、原著者の原稿にあった仮名表記を併記して記載することも割愛せざるを得なかった。

しかし、当然ながらその結果、「沖縄語辞典」は学術的には差支えないとしても、一般人にははなはだ親しみにくい書物となってしまったのである。また、筆者は、編集内容に正確を期し、かつそれを豊かにするために、沖縄へ出張することを岩淵所長に願ひ出たが、出版を急ぎたいという理由から、出張を認めてもらえなかった。学術視察団などと称する実は観光目的の学者の団体が一方で次々と沖縄に押しかけていたのではあったが。

原著者島袋盛敏先生に献本を何冊差し上げるかで室長の柴田武と揉めたこともあった。国立国語研究所の関係者が受け取る一冊のほかにせいぜいもう一冊で十分と柴田が主張したのに対し、筆者は、印税が支払われないことを考慮して、原著者が知り合いの世話になった方々に贈呈する分を含めて、合計10冊くらい差し上げたらよいと主張し、意見が合わなかったが、そばにいた同室の徳川宗賢が間をとって5冊でどうかと提案し、柴田と筆者が妥協し、5冊を差し上げることで決着した。

しかし、国立国語研究所はこの本が出版されたとき、印刷局から印税を受け取っていたということを、筆者はあとで知って、大変驚いた。その印税は、国立国語研究所創立15周年の祝賀行事のときの研究所職員のための宴会の費用に充てられてしまったのであった。もちろん、原著者島袋盛敏先生がそのことを知る由もなかったが、その内情を筆者が先生に明かすと、ご立腹になって、先生は岩淵所長に抗議の書状を送られ、その結果、所長は筆者にはポケットマネーと称するお金を島袋先生に支払われたので、先生のお怒りもようやく収まった。そして筆者はそのことで先生からお礼の書簡をいただいたことを思い出す。現在、筆者の沖縄の自宅書斎に保存してあるはずである。

先生はさいわい、その後、1970年に亡くなられる前に、琉歌に関する著作を次々とお出しになった。

ちなみに、比嘉春潮先生は、空襲で焼け出された伊波普猷(1947年没)を、大先輩として、亡くなるまで杉並のご自宅に迎えられていたが、その研究者としての随筆集である「蠹魚庵漫章」(1971勁草書房)の中に、伊波普猷の「『琉球戯曲辞典』のこと」と並んで、「島袋盛敏君とその業績」という文章があり、その中で「沖縄語辞典」の編集経過についても正確に述べていらっしゃる。ご参照いただければと思う。

なお、「沖縄語辞典」の編集では、筆者は東京大学学生時代からの師であった服部四郎(1908~1995)からもたくさんの指導を受けたが、そのことは、ほぼ同書の「編集の経過」にしるした通りである。

ところで、島袋盛敏、比嘉春潮の両先生とも、学問のある旧士族の成人男性だけがもつ独特な音韻体系を保持なさっていて、それは「沖縄語辞典」の首里

方言のローマ字表記に正確に反映されている。そして両先生のすぐ下の世代では、旧士族の男性であってもこの発音の区別は失われていた。このことを筆者は東京在住の見里朝慶先生の発音から確かめている。そして、地元の沖縄では、この旧士族の男性特有の発音は疾うに聞かれなくなっている。島袋盛敏、比嘉春潮の両先生は若い時代に早くに東京に移られたために、この発音を失わなかったのである。この発音の区別は和文の読み書きにも慣れた旧士族のみが学問の結果身に着ける発音なのであって、平民はもちろん、士族の女性もこれを全く身に着けていなかった。そして面白いことには、首里の貴族の男子もその区別を身に着けていなかったらしいのである。島袋先生が、もと貴族院議員でご高齢の伊江朝助を案内されて国立国語研究所においでになったことがあった。筆者らに貴族の発音を紹介なさるためであった。しかし伊江朝助の話す首里方言には、教養ある士族成人男子の発音の区別が全くなかった。初めから身分の高い貴族にとっては、そういう教養を示すための発音の区別が全く必要なかったからであろう。

「沖縄語辞典」の48、49ページには首里方言の短い音節の一覧表が掲げられているが、その中で太線で囲まれて示された音節がその教養ある士族成人男子の発音である。それはすべて、舌先の摩擦音・破擦音で始まる音節である。そしてこの発音の区別は、琉歌・組踊りなど、文語の琉球語の日本語の平仮名による伝統的な表記法にも反映している。同辞典の51ページの表はその伝統的表記とこの辞典のローマ字による表記とを対照させて示すための表である。この表を利用すれば、琉球語の伝統的平仮名表記と、実際の発音との関係を知ることができる。そしてそれは、琉球文学に関心のある人にとっては必須の知識である。

この士族成人男子の古い発音に関する事実は、20世紀中ごろの琉球語首里方言にまで保たれた言語史上の出来事であるが、実は奈良時代の古事記、そして日本書紀の中の歌謡、そして万葉集などの表記法の性質を理解するために参考になる重要な事実であるので、それについても述べておこう。

実はその表記は、8世紀奈良の人々一般の発音を反映しているわけではなく、帰化人を中心とする隋唐の中国語に通じた貴族の学者のみが行うことのできる

表記だったからである。

すなわち、この表記を古代日本語を専門とする学者が考えているように、当時の奈良の古代日本語の音韻体系の反映だと即断してはならないのである。

橋本進吉以来、国語学者は、古事記・万葉などの万葉仮名による表記に、50音図のイ段、エ段、オ段の音節にそれぞれ2種類の区別があることを発見し、それを甲類・乙類の万葉仮名と命名した。この区別は古代日本語の研究者にとっては必須の知識であり、小学館の「日本国語大辞典」などの大型の辞書にはこれらの音節を含む見出し語にこの区別が示されている。しかし一方、たとえば三省堂の「新明解国語辞典」あるいは「岩波国語辞典」など、おもに一般人および中高生を対象にした小型の実用的な国語辞典にも、学習用の古語辞典にも、また岩波書店の「広辞苑」その他の中型の国語辞典にも、この区別についての記載がない。これは、一般人には知る必要のない高級な知識だといわんばかりの国語国文学者、そして国語辞典編集者たちの態度の反映なのである。しかし、古代日本語を専門とする学者たちは、いったいことの真相を承知しているのかといえ、その答えは否である。

この奈良時代の奈良の日本語の万葉仮名のいわゆる甲乙の区別を巡って、8世紀奈良の日本語の音節の体系がどのようなものであったのか。その音韻体系については日本語を専門とする研究者の間でこれまでに色々な解釈がなされてきた。そして奈良時代奈良の日本語は8母音制度であって、これが平安時代の京都で5母音制度に音韻変化したと考えるのが日本語研究者の通説であったが、研究者により多くの異論があり、この8母音説は、実ははなはだ根拠に乏しいのである。

それは8世紀の古事記・日本書紀・万葉集などをいわゆる万葉仮名を使って編集した人々がどういう人々であったかについての考察を抜きには到底理解できないことだからである。

まず、多数の漢字を使った万葉仮名のような複雑な文字体系を使いこなすには、漢字についての非常に高度な知識をもたねばならない。すなわち唐の都、長安のそのころの中国語を表記するために使われた漢字の発音、すなわち「漢音」とよばれる漢字の発音についての知識、および、それより一段古い時代の

漢字の発音、すなわち「呉音」とよばれる漢字の発音についての知識の一方、もしくは両方をもたなければ、日本語を全部漢字だけで、しかもたくさんの同音の漢字を使いこなしながら書くという万葉仮名は、到底使用できないはずである。万葉仮名を駆使できたのは、一体どのような特別の人であったのか？

漢音の場合、考えられるのは遣隋使、あるいは遣唐使として長安に渡って古代中国語と漢字の読み書きを習得して帰朝した人々である。遣隋使の派遣は7世紀初頭、推古天皇の時代であり、遣唐使の場合は、その派遣は7世紀630年に始まり、9世紀末に唐が衰退し、菅原道真の進言によって終わるが、古事記・日本書紀・万葉の編纂の時期までのことに限定すれば、奈良時代の末頃までを考えればよく、古事記なら、編纂された712年まで、そして日本書紀なら同じく720年までを、そして万葉集ならば、最大限8世紀末までを考えればよい。

呉音の場合は、江南の国である呉から伝わったものではなく、朝鮮半島の百濟から日本に渡来したいわゆる帰化人で、宮廷に仕えて書紀を担当した知識人のもたらした漢字の発音であって、漢音より古い時代の、中国語の古い発音である。そして、これら帰化人が現代にいたる日本語の漢字の発音のしかたの確立に果たした役割は非常に大きかったのである。その影響は、現代の日本の語中の漢語にまで、深く広く及んでいる。

たとえば「人」という漢字を例にとろう。この漢字は、漢音がジンziN、呉音はニンniNであるが、漢音なら、「人類」「人体」「人権」「人口」、そして「日本人」「外国人」「婦人」「狂人」などのように使われる。呉音なら、「人間」「人足」「人相」「人数」、そして「本人」「他人」「仙人」「犯人」などのように使われる。こうして漢音・呉音のいずれもが現代日本語の大切な語彙を作っている。

一方、「人」という漢字は、もとのからの日本語、つまり和語を表すのにも、非常に多く使われる。たとえば「人（ヒト）」「人々（ヒトビト）」「人柄（ヒトガラ）」「人だかり」「人目」「人あたり」「人知れず」「人泣かせ」「人任せ」「人見知り」、そして「お人」「この人」のように、また「ビト（-bito）」と読まれて、「恋人」「尋ね人」「旅人」「村人」「付き人」などと非常に多く使われる。また、「仲人（ナコド）」「商人（アキド）」とも読まれるし、人数を数える助数詞

としては、「一人（ひとり）」「二人（ふたり）」などのように、「り（-ri）」とも読まれる。なお、知られていないが、「り（-ri）」という接尾辞は、語源的には「人（-bito(pito)）」にさかのぼる。

そして漢字を使う日本人なら、誰でも、「人（ヒト）」「人間（ニンゲン）」「人類（ジンルイ）」などが互いに類義語であることを知っている。しかし、たとえば英語で、man「人・男」、humanity「人間性」、anthropology「人類学」という三つの単語の意味の共通性と語源的な相互関係をを知ることは、成人でもそう簡単なことではない。それは「人」という漢字が「ヒト」「ジン」「ニン」という異なる発音を表しながら同じ意味に用いられるということを、小学生の段階から学習して良く知っているのとは、大きく違うのである。しかも日本人は、このような漢字の複数の表音・表意的用法を当たり前のこととして、不思議とも何とも思っていないのである。こんな複雑な表記法の体系は日本語以外、世界のどこにもないのにもかかわらず、である。

こうして、7, 8世紀に始まる漢字の多様な使用が、現代日本語の語彙体系に、そして現代日本人の日常の言語感覚にいかに大きな影響を与えているのかが、理解されよう。

ここで、「沖縄語辞典」に話題を戻したい。

「沖縄語辞典」は、出版後、予期せぬ不運な事態に見舞われた。国立国語研究所所長だった甲斐睦朗が、同和運動からのいわゆる「差別語」についての乱暴な批難を恐れるあまり、「沖縄語辞典」が売り切れのままで重版させないという時期が数年間続いたことがあった。このときは、当時国立国語研究所の部長でのち別府大学に転出した吉岡泰夫さんのご尽力で、索引篇から「めくら（盲人）」などといったいわゆる「差別語」を数語削除するという苦肉の策をとることによって、出版を再開させるにまで漕ぎ付けた。しかし、再開されるまでの間に、東京外国語大学教授を定年退職した英語学者、半田一郎が琉球大学の英文科の教授となって着任して以後、そのほとんどを「沖縄語辞典」に依ったかと思われる「琉球語辞典」（1999大学書林）と題した本を出版された。「沖縄語辞典」が絶版になったとお考えになったためであろうが、事実、そのころ

「沖縄語辞典」は絶版同様の状態にあったのである。現在入手できる「沖縄語辞典」は「差別語」削除後の、2003年印刷の9刷である。

ちなみに、半田一郎は、久米島出身の、もとロシア通の外交官で、親米一辺倒の外務官僚から排斥されてのち、評論家として現在活躍中の佐藤優に琉球語を教授したというほど、語学の才能のある方であった。しかし先日、交通事故で惜しくも不慮の死をとげられた。

なお、島袋盛敏の原稿用紙に手書きされた原著の題も「琉球語辞典」であったことをここに記しておこう。島袋盛敏は、漢文の教師として務めた成城学園女学校を退職した後、この原稿を書くのに専念された。それは、筆者が国立国語研究所に入所する前、1950年前後のことである。その原稿用紙の稿本は、「沖縄語辞典」が出版された直後に、筆者が国立国語研究所の図書館の蔵書として大切に保管するように措置したので、現在も閲覧が可能な筈である。

なお、出版からほぼ半世紀を経て、沖縄で「沖縄語辞典」の改訂のための作業が目下進行中であるが、それについては、Ⅲ沖縄言語研究センターの項で述べる。

ちなみに、筆者は、先に述べたような事情で、「沖縄語辞典」が出版された1963年まで沖縄へ行くことができなかった。そのため、筆者の沖縄行きがようやく実現したのは、その出版の5年後の、1968年のことであった。10月からの2か月間、1年間の仲宗根政善先生が東京大学に留学される間に琉球大学の国語学の集中講義することを先生から依頼されたからであった。このときの沖縄出張の期間、名嘉順一さんを知り、彼にいろいろとお世話になった。そして加治工真市、津波古敏子、石垣繁、玉城政美、宮良安彦など、のちに長く沖縄言語研究センターで筆者と一緒に共同研究した方々、そしてのち琉球大学国文科の同僚となる、仲程昌徳、岡本恵徳、上里賢一、池宮正治らの諸氏と初めて巡り合ったのだった。

そしてその仲宗根政善先生は、ご自分の今帰仁方言の研究の過程で、この「沖縄語辞典」をもっとも深く精読された方であった。先生の非常に多くの書き込みのある「沖縄語辞典」が、仲宗根家から琉球大学図書館に寄贈された蔵書の中に含まれているので、琉球大学でそれを閲覧することができるが、それ

は琉球語研究にとっての貴重な研究資料である。

なお、服部四郎が琉球語研究において果たした役割は非常に大きいものであったので、服部四郎の琉球語研究全体の軌跡をここにまとめておこう。

服部四郎の琉球語研究の歴史は、ともに東京大学の学生だった頃の仲宗根政善との出会いから始まる。その後、おふたりは深い友情で結ばれ、研究者として永く協力し合う関係となった。

服部四郎はその出会いを契機にして、大学生時代から琉球語の研究を開始し、当時在京中だった伊波普猷を訪ねたりしている。「琉球語管見」（1937雑誌「方言」7ノ10、服部「日本語の系統」1959岩波書店に再録）は、彼が日本語方言の間の単語アクセントの対応という歴史的な発見をした数年後に書かれた論文である。その後、服部は当時の満州に移り、モンゴル語など、アルタイ系の言語の研究に入れ、タタール人の奥様とめぐり合われて結婚なさるが、そのころから第二次世界大戦後まで、琉球語研究からは一時離れられた。筆者がなんかの用事で東京初台にあった先生のお宅に伺ったとき、応接間に出てこられた奥様とタタール語で会話を交わされたことを筆者は印象深く覚えている。

服部の琉球語研究は第二次世界大戦後に再開されたが、そのころの研究成果は「世界言語概説」下巻（1955研究社、市川三喜・服部四郎監修）の中の「琉球語」（金城朝永との共著）に結実している。

1955年、服部四郎は知里真志保とともにアイヌ語の緊急調査を開始、その翌56年には東京大学言語学科のスタッフを誘い、また学生でのちアイヌ語学者となった、田村すず子を連れて、北海道各地でアイヌ語を調査されるが、その55年の10月からの3か月間、琉球大学の副学長であったかつての学友、仲宗根政善の招きに応じて初めて沖縄に渡り、琉球大学で集中講義をされた。このとき、研究のために久高島にも渡られたが、そのときの案内役を務めたのが、琉球大学方言研究クラブの創始者のひとりで、伊平屋島出身の名嘉順一さん（1933~2010）であった。服部四郎はこの沖縄滞在中に、琉球大学の学生の音声学の学習のために、自ら発音した音声の録音テープを残されたが、そのテープは琉球大学の学生たちの組織である方言研究クラブによって、代々引き継がれて、今日に至っている。またその時の縁で、名嘉さんは東京大学言語学科の

研究生となった。

しかしその後は、このクラブ員から大学院生として東京都立大の平山輝男の所へ入学する人が中本正智に始まり、相次ぐこととなる。東京大学の大学院への入学は当時の琉球大学卒業の学力では到底無理であっただろうが、東京都立大の平山輝男は、積極的に大学院入学を受け入れた。しかしそのために、琉球大学卒業者で都立大で方言学を学んだ人々の、方言学者としての質の低下を招いたことは致し方のないことであった。

筆者は、その平山輝男の琉球語方言をふくめた方言研究の質を買うことができないし、弟子に対するその権威主義的で独裁的な統制ぶりにも到底賛成しかねる。筆者はそれが琉球語方言学全体にもマイナスの影響しか与えていないと考えている。日本のような、成人後も個人の自立心が確立されていないような社会では、指導者の資質が指導される人々のあり方に、良くも悪くも、大きな影響を及ぼす。この点で服部と平山は一貫して対照的であった。そしてそれは、服部四郎とその東大言語学科で後継者となった柴田武の場合も同様であった。

なお、このときの服部四郎の沖縄滞在については、ご子息の服部旦さんのまとめられた「服部四郎沖縄調査日記」(2008汲古書院)に詳しい。

服部先生は1983年の文化の日に文化勲章を受章されたが、偶然にもその時、仲宗根先生も沖縄県功労者賞を受章なさった。

その受章のずっとのち、服部先生は論文「日本祖語について」の執筆のため、何度か沖縄へ渡られたが、そのあるときに名嘉順一さんと筆者は名護市内の居酒屋で先生からご馳走になったことがあった。そのとき、「柴田君は許せない」とおっしゃる先生に対して、名嘉さんと筆者とが申し上げた会話の内容を筆者は忘れることが出来ないが、その内容を印刷物の中で明かすのはあまり適切ではなさそうなので、ここでは割愛するが、日本の言語学の歴史、そして琉球語研究の歴史全体にも深く係る重要な裏面史なので、別の機会に、別の形で、上げたい。

服部先生は1995年1月29日に亡くなられたが、同年2月14日に東京で行われたご葬儀は、沖縄で行われた仲宗根政善先生のご葬儀と、またしても奇しくも日が重なってしまった。筆者はそのとき、服部先生のご葬儀に参列するために上

京し、仲宗根先生のご葬儀には、筆者の家内が代理で参列した。

なお、名嘉さんは2010年1月22日に亡くなられたが、たまたま沖縄に滞在中だった筆者と家内は、亡くなる前日に名嘉さんを病院に見舞うことができた、筆者が最初に沖縄を訪れた1968年以来、筆者、そして筆者の娘も、名嘉一家に色々とお世話になったのだったが、これが名嘉さんとの別れとなった。

⑥国立国語研究所編「日本言語地図」(1966~1975)作成のための調査

これは日本全域を対象にした言語地理学的研究であるが、この大規模な事業は1955年ころからその準備に入り、第6研究室、のちの地方言語研究室がそのための調査票の作成に当たった。そして国立国語研究所が全国都道府県に原則一人ずつ委嘱していた地方調査員、合計50人が調査者となって、それぞれの県の言語地理学的調査を分担するという形で調査が行われた。

調査の開始までに準備期間として2年をかけている。調査項目の選定と調査票の作成、そして作成した調査票が実際の調査で不具合が生じないか、その出来不出来を検証するためのプリテスト (pretest 予備的な試行調査) などである。プリテストは、東京に近い山梨県上野原町に出かけて行なった。

日本全体での調査地点の合計は2400地点であり、個々の調査地点の選定は地方言語研究室に国土地理院の5万分の1の地図を買い揃え、その地図ごとに調査地点が1乃至2地点入るようにして選定された。地方言語研究室が採用したこの地点の選定方法は、機械的でありすぎるために、地点の位置が正確であり、また度々起こる地名の変更によって地点の位置が不明になることを防げるなどの長所をもつ反面、方法論的にみれば、かなり大まかであり、住民の分布の実態、そして方言圏の実態がいつも正確に反映されるとは限らないという欠陥もあった。

この全国2400地点の調査には6年を費やした。

地方調査員はのち地方研究員と改称されたが、これは単に体裁を考えての名称だけの変更に過ぎなかった。地方研究員には、調査に使用する調査票と、調査のとき被調査者に見せるための動植物、人体の部分などを描いた付図とが用意された。これらの調査のための資材は、地方言語研究室で各地方研究員あて

に梱包されて、一斉に全国に郵送された。

この調査票の調査項目数はのべ300項目であった。そしてすべて、地方研究員が地方言語研究室から指定を受けた調査地点に出向き、被調査者に面接して調査するという方法によって行われた。その調査は、地方研究員が選定した原則60歳以上の、その土地で生まれ、その土地で生活してきた老人を被調査者にして行われたが、1地点の調査には、被調査者次第で、短ければ2時間以内ですむこともあり、様々な理由で一日以上かかることもあった。被調査者へは、調査の記念として国立国語研究所が用意したタオルが配られることになっていたが、地方研究員自身の出費で菓子折りなどを用意する場合も少なくなかったはずである。

地方研究員へは、国立国語研究所から調査の旅費に満たない程度の謝礼が年度末に支払われるだけであったが、国立国語研究所は、地方研究員自身の方言研究への熱意、そして国立国語研究所への好意に依存して、さらには、被調査者の善意、各市町村の教育委員会、また各集落の自治会などの協力などを得ながら行われたもので、研究所自身は、少ない予算の支出で、このような長期で大規模な調査が行われたのであった。このような調査が地元から拒否されることもなく成功したのは、日本人の国民性によるところも大であったからとも言えよう。

日本でこの「日本言語地図」は、かつてフランスでジリエロン (J. Gillieron) がたったひとりで国中を調査して回ることにより作成された先駆的な言語地図、「フランス言語図巻」(1902~12) とは、この点が対照的に、非常に違っている。両者は、方法論としては一長一短があるといえようが。

国立国語研究所の地方言語研究室での担当者は、室長の柴田武(1919~2007)と、室員が野元菊雄 (1922~2006)、上村幸雄(1929~)、徳川宗賢(1930~1999)の3名であったが、学習院大学を卒業した徳川は、同大学の教授であった東条操の弟子として方言学を専攻した関係で、作成の準備段階から調査結果の整理と言語地図作成にいたるまで、この仕事の中心的研究者として勤務した。さらに、W. グロータス (1911~1999) が長期間、無償でこれに全面的に協力した。W. グロータスは東京在住のベルギー人神父であり、言語学一般、そしてとく

に言語地理学に、深い知識と長い経験を持ち、中国に、そして兵庫県豊岡市にも滞在歴のある方であった。

地方言語研究室では、全国に委嘱した各地方研究員との意志の疎通を図る目的で、柴田・上村・徳川の3人が分担して、各地方研究員と地方言語研究室員とが同行して同一の調査地点一か所を一緒に調査することを各県一回ずつ行なった。そしてそれを同行調査と名付けていた。また、年に一回、やはり意思の疎通と親睦とを目的に、地方研究員全国協議会を国立国語研究所で開催した。その時には、参加者全員の揃った記念写真の撮影も行ったが、その写真は、今となっては、大変貴重な記録である。

この研究の準備の最初の仕事は、東条操の「全国方言辞典」から方言的変異の多い項目を探して抜き出すという仕事であったが、これが言語地理学調査の準備作業の最初のものであった。そして、300の調査項目は、調査票作成の準備段階では、調査対象が、珍しい動植物名など、方言的変異に富んだ語彙に傾き過ぎているきらいがあった。ともかく、方言地図になるような方言的変異の多い単語でなければ、地図として面白みが無いだろうという、単純な理由からであった。しかし、筆者が調査項目の中に基本語彙を加える必要を主張したので、数としては不十分であったが、調査項目に基本語彙がある程度加えられることとなった。しかし、例えば、着物を洗濯することを「センタクする」というか、それとも「センダクする」というか、など、音声的変異についての調査者のごく小さな興味から加えられた項目も、一部残ったままであった。世間の注意を引く項目がほしいという、室長柴田の、彼らしい要望ゆえであった。こうして、国立国語研究所の言語地理学的調査票の調査項目は、後述する沖縄言語研究センターの言語地理学における調査項目の選択方法とは大きく違っている。

また、白沢宏枝は、1961年に地方言語研究室の研究補助員として採用されたのち、この言語地理学的調査、およびそのあとに引き続いて地方言語研究室が行なった地方研究員への委託調査「日本文法方言地図」全6巻（1992~2006）のための調査結果の整理が終わるまで、非常に長期間、言語地理学調査にかかわる仕事を主な任務として、研究室に勤務した。それゆえ、国立国語研究所の

言語地理学的研究の全過程の中での最大の功労者であったということができよう。いっぽう、「日本言語地図」の整理の段階以降に国立国語研究所員として採用されて、この研究室に勤務した研究員たちは、大学のポストを求めて、次々と転出して行ったのであった。

ちなみに、白沢さんは、もと地方言語研究室に勤務していた筆者の家内（旧姓渡辺）が筆者と結婚したために、ほかの研究室へ転勤を命ぜられ、そのために、そのあと採用された同じ臨時筆生であった。

なお、当時国立国語研究所に大勢いた臨時筆生の雇用期間は半年間となっていたので、そのあと1日だけ休ませて雇用を打ち切ってから再雇用し、それを繰り返すことによって長期間雇用するというものであった。その後に国立国語研究所で結成された職員組合の強い主張によって、研究補助員という名で全員が定員化された。筆者はその職員組合の結成の首謀者の一人だったので、管理職にあった人々からは、当然、煙たがられる存在となってしまった。

話をもとに戻すと、「日本言語地図」作成のための研究は、準備に2年、調査に6年、結果の整理に8年、都合16年の長期間を要した研究であった。筆者は調査すべき単語が方言的変異の多い語彙に偏っていて、調査すべき重要な語彙が少なすぎると感じていたので、伝統的な方言的語彙が次々と消滅する前に、引き続いて第2次の言語地理学の調査を行うことを徳川宗賢に提案したことがある。しかし彼は結果を整理するのが先だと考えていたので、筆者の提案には応じなかった。そして調査結果の整理は、まだ電子計算機が普及するずっと前であったし、方言的変異の多い単語が非常に多かったために、8年もの永い歳月を要したのだった。この作業は、現在であれば、電子機器の大きな進歩のおかげで整理の期間を遥かに短縮できたはずである。しかし、整理の作業を急いだために、方言が衰退し滅亡する前に、さらに方言の語彙を調査するための貴重な時間は、残念ながら失われてしまった。

⑦「全国方言文法の対比的研究」

この研究は、「日本言語地図」のための調査が終了して「日本言語地図」の

作成が始まった時期に、筆者が、地方言語研究室長から話しことば研究室長に移って開始した研究である。

この研究を開始した動機となったのは、筆者に代わって地方言語研究室長となった徳川宗賢以下の室員が言語地図の作成に忙殺されたために、国立国語研究所の地方研究員に委嘱する研究を立案し実施することが地方言語研究室に不可能となってしまったことにあった。

国立国語研究所にとって貴重な地方研究員制度を維持し、全国規模の方言研究を引き続いて実行することが出来なくなれば、急速に変容し消滅しつつある全国の伝統的方言が老年層からまだ聞き取れる間に研究調査することが出来なくなってしまう。そこで全国的な調査研究を続行することが重要であると筆者は判断した。さいわい、研究所内の同意も得ることができたので、この研究を開始することが可能となった。

この研究の目的は、琉球語を含む日本語圏内の全国方言の文法現象を統一的方法によって鳥瞰的にとらえて、その結果を一覧表と言語地図にすることにあった。

この研究は筆者自身が発案し、責任をもった研究であったので、その詳細をやや詳しく述べることとする。

まず、この研究に取り掛かるためには、日本語の文法研究史の中に大きな問題があったことから述べねばならない。

それは、専門の方言研究者をふくめて、当時、国語学界の全体が文法学的研究において混乱した状態にあったということである。言い換えれば、日本語の文法に関する定説と言えるものが存在しない、ということである。したがって、ここでもその問題に触れないわけにはいかない。

それは次のようなことである。

それは、東京大学の橋本進吉（1882~1945）の文法学説がその弟子であった岩淵悦太郎らによって中等教育の国語科の検定教科書に持ち込まれて、そのいわゆる「橋本文法」と言われたものが、第二次世界大戦の戦中から、戦後にかけて、あたかも定説であるかのように扱われて教育に持ち込まれたことである。

そしてそのことの生んだ結果は重大であった。すなわち学校で国語の文法を

習ったほとんどの人が文法の学習を嫌いになり、何の役に立も立たず、文法は、試験のために、仕方なく丸暗記するものと考えようになってしまったことである。そればかりではなく、その悪影響は、実は非常に大きいものであった。

外国語の文法から学んで日本語の構造の理解に役立てることのできたごく少数の知識人を除けば、日本語の文法現象と、個別言語を超えて存在する普遍的な論理との関係を捉えることが困難になってしまったのである。言い換えれば、それは論理的で説得力のある文章を読み書きし、また口頭で簡潔に正確な情報を伝達することの苦手な人を増やすという結果を学校教育が招いてしまったのである。

これは実は、先進国の中で、欧米諸国にはない日本に起きた特殊な事情なのである。欧米諸国では、それらの国々の言語の文法は、日本のそれに比べれば、はるかに正確に言語の構造を捉えているので、学習すれば、実用性の高い知識となり、母国語・外国語の習得に役立つのである。それはたとえば、名詞の格変化（曲用）、動詞の活用、不規則動詞の型などといった、その言語の文法についての基本的な部分についての知識である。すなわち、それは普通、品詞論と形態論に属する知識であって、その上部構造としての構文論についての知識ではない。

ここでは日本の学校で習う文法の欠陥の例を一つだけ挙げておこう。

学校文法では、動詞の活用形が「未然・連用・終止・連体・假定・命令」の六つだとするのが普通で、読者もそれを記憶している人が少なくないはずである。しかしこの六つの「活用形」とされるものは、相互にはいったいどういう関係にあるのか。そして活用形はなぜ六つで、それ以外にはないのか。そして一体、六つの活用形自身は単語なのか、それとも単語の切れ端に過ぎないのか。これに答えることは、大学出の知識人でも到底無理である。形態論に属する初歩的な部分に分析の大きな間違いがあるために、これが何に関する知識であるのか、学習者には分からなくなってしまうのである。

一方、橋本進吉自身は日本語の歴史言語学、現代日本語研究の両面で、とくに音韻史研究、そして文法研究の分野で非常に優れた研究者であった。かつ、清貧で世俗の野心の少ない学者であったことも知られている。しかし、橋本進

吉の文法学説は、初期の行動主義心理学に強い影響を受けた言語学における世界的流行であった、アメリカのL. Bloomfieldの"Language" (1933) に典型的に見られた形式主義的な、そして疑似客観主義的な傾向とたまたま一致して、その学説が日本で知られる以前に、橋本の学説は、独立に日本で日本語を対象にして展開された学説だったのである。あるいはそれは、欧米の形式主義の学説に先行していたとさえ言えよう。言語の形式だけを意味から切り離して分析しようとするこの形式主義は、アメリカを中心にして、言語学における世界的流行であったのである。

ちなみに筆者が東京大学言語学科に入って最初に服部先生の演習に出席したときのテキストが、L. Bloomfieldの"Language"の行動主義理論のさわりの部分であったが、筆者はこのとき、非常に戸惑った。そして筆者は、この言語理論は言語学の方法としては到底受け入れがたいと思った。意味を研究しない言語学など一体どうなるのか、と思い、卒業論文のテーマを意味の研究とすることにした。

アメリカ留学から帰朝され服部四郎先生も、アメリカ言語学の実情、研究の粗雑さに失望して、言語学の方法論を論じた論文「メンタリズムかカメカニズムか？」(1958「言語研究」19/20) (服部「言語学の方法」1960岩波書店に再録) を発表された。実は文法学におけるこの形式主義的傾向は、その後も長く続き、チョムスキー以降の形式主義にまで引き継がれて、日本を含め、この形式主義の理論は、一見美しい理論には見えても、実は安易な空論にすぎず、言語学者を怠け者にしてしまって、世界の言語学の正常な発展にとって大きな打撃を与えてしまう結果を生んでいったのである。しかしこれについては、ここではこれ以上深く立ち入ることができない。

こうして学校教育の中では、橋本のその形式主義の学説が、上に述べたように負の要因として働いてしまったのであった。日本の文法学には、山田孝雄、三上章 (1903~1971)、奥田靖雄 (1919~2002) をはじめ、色々と優れた文法学説を提唱した研究者が何人もいたけれども、彼らの学説は、学校で検定教科書から学ぶ文法とは、事実上ほとんど無関係であった。

筆者は、日本の文法学の置かれていたそういう時代的な条件の中で、とくに

文法学を専門としない地方研究員へ調査を委嘱することを前提にして、この研究を立案したのであった。

また、そのころの地方研究員へは音声学が必ずしも全員に普及しているとは言えなかったので、委託する方言調査に国際音声字母の使用を要求することはできなかったが、音韻論的なレベルのローマ字表記ならすべての地方研究員に可能であると筆者は判断した。

具体的には、この研究は次の4種類の調査票による調査からなっている。

第1調査票、第2調査票、第3調査票、第4調査票

また、この研究全般にわたる「調査票解説」(A4版9ページ、1966)が作成されている。ほかに表記法を定めた「別紙 方言の表記について」が添えられている。

そして対象とする方言の調査票への記入は、すべてローマ字母による音韻表記と定めたが、50音図タ行の「チ」とタ行の拗音については、それが破擦音であることを明示するために、ci、cya、cyu、cyo、cyeのように字母「c」を用いることと定めた。また、東北地方の諸方言のように、イ段とウ段の音節の母音がいわゆる「中舌母音」と呼ばれる、実は舌先の(coronal)な前舌母音である場合には、それを慣用に従って、字母i、uにウムラウト、もしくはダッシュの付いた、いわゆる中舌母音の音声記号で表記することとした。

また、日本語でつまる音(撥音)「q(ッ)」とはねる音(促音)「N=小さい大文字のN(ン)」として音節末に立つ独特の子音以外に、子音が語末や音節末に来る場合には、音節を開く子音と同じローマ字母でこれを表記することとした。鹿児島県の大部分や長崎県五島列島など、九州の南西側の諸方言などがそうである。たとえば鹿児島各地の方言で「耳」をmim、「靴」をkutとするようにした。このように多くの子音が音節末、そして語末に立つことができる方言には、ほかに琉球語の一部の方言がある。奄美大島本島南部方言、宮古諸島諸方言などである。

そのほか、説明が必要な独特の音韻論的な事実遭遇した場合には、その旨を注記したうえで、適切なローマ字表記を工夫してそれを表記するというこ

とした。

また、同一の調査項目に対応する方言形が複数存在する場合には、それも調査して列挙するように求めた。

上記の4種類の調査票のおおよその内容は次の通りである。

第1調査票 第4調査票と同じ地点の方言について、動詞の形態論的な構造を地方研究員自身が調べるための調査票。

第2調査票 地方研究員が第4調査票によって調査した地点の方言について、地方研究員自身が動詞の活用型の種類を調べるための調査票。

第3調査票 第1調査票が、地方研究員が使用し、保存するための調査票であるのに対して、第3調査票は国立国語研究所への提出用の調査票であり、内容は同一のものである。

第4調査票 地方研究員が調査地点に赴いて選定した被調査者に対して行う臨地の面接調査のための調査票。調査地点は第1、第2、第3調査票と同じである。

各調査票について以下にさらに詳しく説明する。便宜上、第4調査票についての説明を優先させる。

A 第4調査票

第4調査票は調査者が記入するためのA5版の横書きの調査票と、調査のときに被調査者に見せるために、標準語で大きく太字で印刷されている縦書きの用紙とからなっている。被調査者には、その標準語で書かれた文を、被調査者が日常使っている方言に言い換えてもらう。標準語で書かれた文は、合計79の文である。その標準語の文は、成人の男が使う日常語からなっていて、丁寧な言葉や、文章語的な表現を避けて作られているが、それは出来るだけ日常の普通の言語を調べたいためである。たとえば、調査票の最初の文「きょうは おれは いそがしい」のように。

そして被調査者は、その調査地点の集落で生まれ、そこで永く生活した60歳

以上の男性とするが、そういう被調査者が見つからない場合には、被調査者の年齢を60歳以下に下げてもよく、また被調査者を女性に変えてもよいということとした。その場合、女性の被調査者は、標準票で示された男性的な表現をたやすく方言の女性の日常語に改めてくれる。日本語では、この年代の人であれば、標準語の場合も、方言の場合も、男女間で日常語に相当大きく異なる点があるのが普通だったので、それが可能なのである。

一方、地方研究員が調査のとき記入するための記入用の調査票には、その79の文によって調べようとする方言の文法上の注目点が、文ごとにあらかじめアンダーラインを付けて示してある。通常そのアンダーラインは79の文のそれぞれに複数個所付いており、調査者にその文で調査する意図が分かるようになっている。この面接調査に必要な時間は1時間内外である。

この第4調査票で調査する79の文は、被調査者がわかりやすく、答えやすいように、また機械的な質問の連続で被調査者を退屈させないように、日常生活で出会うような出来事を表している79個の文が、なんとなく内容的に関連があるかのように、順序を考慮して配列されている。

そして第4調査票の末尾には、使用頻度の高い格助詞と係助詞が、前の単語の語末の音韻と融合して形を変える現象について記入するための欄が設けてある。そうした音声の融合現象は、実際あちこちの方言に多く見られて、この調査票に対して被調査者の答える文にも頻繁に現れるので、この現象が調査とその整理の段階で早くから明らかにしておく必要があったからである。

なお、このような方式での調査を滞りなく実行することが可能なのは、標準語の近年の普及によって被調査者が標準語の文をほぼ正しく理解できるからであり、また文字で示された標準語の文を、抵抗感なく容易に読み取れるという、日本国民の読み書き能力が高いからである。この二つの条件がこの調査の実施を可能にしているのである。すなわち、日本での20世紀後半の日本国民の言語能力がこの調査を可能にしているのである。また、調査地点から調査者が追い払われたり、調査が拒否されたりしないのは、この国の治安の良さと、そして日本人の国民性に深く係っているからである。

B 第2調査票

第2調査票は、用言（動詞・形容詞）の語形変化、すなわち活用の型について、地方研究員の担当する都道府県の方言を標準語と対比させながら表に記入する、という方式の調査票である。

標準語のいわゆる4段活用動詞は、語幹末子音ごとに、力行・ガ行・サ行・タ行・ナ行・マ行・ラ行・ワ行の各行の動詞に分類されるが、担当地域の方言はどうなっているか、そして標準語には、4段活用動詞のほかに、1段活用と呼ばれる動詞が多数あるが、担当地域の方言はどうなっているか、古い二段活用が残っていたり、あるいは一段活用動詞の4段活用化が起きているか、などといったことである。さらに標準語には、変格活用などと呼ばれる不規則動詞が「する」、「来る」、そしてそのほか、数語ある。たとえば「行く」が「行った」と変化したり、「いらっしゃる」などの命令形が「いらっしゃい」などと変化するのも、こうした不規則変化の一種である。担当地区の方言の不規則動詞はどれだけあって、どこが不規則なのか。それとも不規則動詞が規則動詞に変化してしまっているか、などを調べるのが狙いである。

形容詞の場合は、連用形が「高く」など、-kuとなるものと、「悲しく」など、-sikuとなるものがあるが、それらを合わせて第1形容詞と呼ばば、ほかに、連体形の語尾が「静かな」など、-naで終わる第2形容詞（いわゆる形容動詞）がある。第一形容詞は、たとえば「高い」が「たっか (taQka)」となる九州の方言などのように、全国で活用の仕方に色々な違いがある。また、第二形容詞がどの程度発達しているかは、方言によって様々に違っている。さらに「同じ」のような不規則な形容詞があるほか、「本当の」「乾いた～乾いている」など、形容詞的な機能を持ちながら、多くの文法学者からは形容詞とは見做されない単語が多数ある。

連詞（繫辞・コピュラ）の場合には、「だ・である・です」などと意味と機能を同じくする単語が担当する地域ごとにどのくらいあるのかを調べるのがこの第2調査票の調査目的である。

また、たとえば琉球語では「だ・である」に相当する連詞は「ヤン」であるが、琉球語の連詞は自立語であるから、「ヤン」1語だけで文となることができ、

「そうである」という意味を表わす。また、標準語では、「これは本。」のように連詞なしの文も多用される。

これらの場合に担当地区の方言はどうなっているかを調査するのも、調査の狙いである。

C 第1調査票

第1調査票は、動詞、形容詞、および「だ・である・です」などの連詞（繫辞、コピュラ）、すなわち、日本語文法学で用言と呼ばれているもの全体の形態論的構造を調査対象とした調査票である。

第1調査票では、動詞の形態論的な構造を、マ行4段活用動詞である「読む」を例にとって、その形態論的な構造を標準語と対比しながら調べるという方法をとっている。同じく、第一形容詞は「高い」を例にとって、第二形容詞（いわゆる形容動詞）は「静かだ」を例にとって、そして連詞は「海だ」を例にとって、それぞれの形態論的文法範疇の細部を明らかにすることを目的としている。

この調査票は、調査票の各欄にあらかじめ示された標準語の形に、意味的に、または機能的に対応する方言形を記入するように作られている。そしてこの調査票はB4版の大きさである。

調査の対象としている形態論的文法範疇の主なものは次のようである。

「とき (tense)」、例「読む・読んだ、など」

「すがた (相, aspect)」、例「読んでいる・読んでいた、など」

「認め方 (肯定と否定)」、例「読む・読まない、など」

「丁寧さ (普通と丁寧)」、例「読む・読みます、など」

「きもち (mood) 1 (つたえ・たずね・命令・さそい、など)」、例「読む・読むか・読め・読もう、など」

「きもち (mood) 2 (断定・推量、など)」、例「読む・読むだろう・読むらしい・読むかもしれない、など」

「態 (voice) (能動・受動・使役・可能、など)」、例「読む・読まれる・読ませる・読める、など」

「待遇（普通・尊敬・謙譲、など）」、例「読む・お読みになる・お読みする、読みやがる、など」

「やりもらい（恩恵の授受）」、例「読んでやる・読んでもらう、など」

「きれつづき（文末の形か、あるいは連体修飾の形か、または様々な連用修飾の形か、など）」、例「読む（終止と連体）・読み・読めば・読むので、読みながら、など」

動詞・形容詞・連詞は、それぞれ、これらの形態論的文法範疇を複数あわせもっている。たとえば動詞「読みませんでしたならば」という語形は、とき（過去）・みとめかた（否定）・ていねいさ（丁寧）・きれつづき（仮定）などの範疇を兼ね備えてもつ語形である。その可能な組み合わせの種類は非常に多いので、第1調査票は、そのうちの主要な組み合わせのみを調査対象としている。

ちなみに学校文法では、「読みませんでしたならば」を単語とは見做さずに、「文節」と呼んで、「読み・ませ・ん・でし・た・なら・ば」のように8個の「単語」に区切って、これを「読み（=動詞連用形）・ませ（=丁寧の助動詞連用形）・ん（=打消しの助動詞終止形）・でし（=丁寧の助動詞連用形）・た（=過去および完了の助動詞）・なら（=助詞）・ば（=助詞）」のように分析するように教えるのであり、単語の語形全体が持つ文法的機能を教えることがない。学校での文法の学習が面白くなってしまう理由がこのことでお分かりいただけるかと思う。

D 第3調査票

第3調査票は第1調査票で行った調査結果を地方研究員が国立国語研究所へ報告するために用意された報告用の調査票であり、内容は第1調査票と同一である。便宜上第3と名付けて第1と区別したに過ぎない。

この「全国方言の対比的研究」の調査結果の整理は、筆者が1974年から2年間の西ドイツへの出張を経たのち、後で述べる理由で国立国語研究所から琉球

大学法文学部教授へ転出したために、非常に遅れることとなってしまった。

筆者が話しことば研究室長だった頃は、同室の研究補助員の衛藤蓉子さんに手伝ってもらい、琉球大学への転出のすぐ後の2年ほどは、筆者が上京した際に、国立国語研究所の研究補助員を退職したお二人の方、遠藤（旧姓松垣）玲子さんと豊泉（旧姓内山）忍さんともに調査結果の整理をお願いした。

しかし、その後は筆者が沖縄で沖縄言語研究センターの仕事で大変多忙となったために、この整理の仕事は大幅に遅れることとなってしまった。

そして世紀が変わった2005年以降は、琉球大学法文学部の狩俣繁久研究室で、さらに2010年以降は、東京都立川市に移転した新築の国立国語研究所で、新たな精鋭の研究者のチームワークによって整理の仕事が進行するという運びとなった。そしてその仕事は、今世紀に入ってからの情報機器の大きな進歩がこれを後押ししてくれることとなった。

最近のこの研究態勢は、既に高齢となってしまった筆者にとっては大変有難いことである。そしてこの調査をかつて筆者が委嘱した全国の地方研究員の方々は、その多くがすでに他界なさっているが、その方々のかつてのご尽力に対しても、筆者としてはなんとかようやく報いることが出来そうになったのであった。

2011年現在の国立国語研究所内のこの研究グループは、まとめ役の竹田晃子さん以下、次の8名である。以下に50音順にお名前を列举する。

阿部貴人、井上文子、小川晋史、木部暢子、盛 思超、竹田晃子、三井はるみ、吉田雅子

⑧「方言文法全国地図（略称GAJ）」作成のための研究

この調査は筆者が2年間の西ドイツのルール大学の東洋学研究所への出張を経て、1976年4月から琉球大学へ移動したのと同じ年から、佐藤亮一ら方言言語研究室のメンバーが計画した研究であって、「日本語地図」の場合と同様に、国立国語研究所が地方研究員に委嘱して行なった調査研究である。

研究の開始は1976年で、準備に1年間、調査に10年間、そして調査結果の整理と出版に18年間もの時間をかけている。計画開始から30年間2005年の計画終

了まで、合計実に30年間である。

筆者から見れば、国立国語研究所の担当者が文法の専門家ではないこともあって、調査としては、内容、方法とも単純で、機械的に過ぎる。これでは委嘱される専門家集団である地方研究員を単なる機械的な作業員として使ってしまうもったいない委嘱になってしまっており、かつ被調査者にとっては、単純で退屈な質問の連続に答えるだけとなってしまう。

ちなみに、この研究はたまたま筆者が国立国語研究所から琉球大学に転出した1976年から、皿沖縄言語研究センターで後述する筆者の主導した「琉球列島の言語の研究」が行われた時期とほぼ重なっている。そしてその時期は、琉球列島を含めて、ほぼ日本全土で方言が衰退し、方言の伝統的な語彙が失われていく時期と一致しているのである。しかも調査終了後に18年間もの長時間かけて調査結果の整理の作業に当たったために、方言が減びていくという大切な時期に、地方研究員への新たな委託研究を行わなかったのであった。その結果は重大であった。そのことによって、国立国語研究所の地方研究員制度そのものが消滅してしまったからであった。

当時の担当者たちがどう考えていたのか、筆者には分からないが、それは日本の組織的な全国規模の方言研究にとって大きな損失であった、と筆者は言わざるを得ない。

「月刊言語」第35巻第12号（2006、12月号大修館）は「地図に見る方言文法『方言文法全国地図』の意義と方言文法研究のこれから」という題の特集（p20~p83）を組んでいて、そこでこの「方言文法全国地図」について、国立国語研究所の佐藤亮一、大西拓一郎らこの調査研究の発案者と担当者、そして調査結果の整理に与かった国立国語研究所の研究所員を含む多数の研究者とが「日本文法方言地図」の様々な調査項目についての解説を書いている。

執筆担当者には東北大学の出身者がほとんどであるが、かつて柴田武が数年間東北大学で方言学について集中講義を続けたことがあり、柴田から学んで方言学者となった加藤正信、佐藤亮一、本堂 寛、真田信治らが「日本言語地図」の結果の整理のために国立国語研究所に採用されて、地方言語研究室長の徳川宗賢もとで働いたが、その後、室長となった佐藤亮一が「日本文法方言地図」

の仕事立案したのであった。

しかしこれらの人々は、その採用されたいきさつ、そしていずれもかつて柴田武が東北大学に集中講義に出向したとき以来の東北大学出身の方言学者であったこともあって、筆者から見ると、言語学者としては視野の狭い研究者たちである。一つの東北大学出の学閥を形成していたが、彼ら自身の国立国語研究所の方言研究事業そのものへの執着が小さかったためか、次々に転出してしまった。時間の経過とともに、東北大学卒の研究者の多くが、研究者として育っていれば大変幸いである。学閥からの解放という点では、平山輝男を師とした東京都立大学出身の方言研究者、そして国学院大学出身の方言研究者たちが同様なやはり視野の狭い学閥的研究者集団を形成しているのと類似している。

研究者の一人一人が自覚しているか否かにかかわらず、残念ながら、学閥の存在は、全体としては、国立国語研究所の方言学研究者を含め、日本における方言学の水準が高まって行かないことの大きな要因をなしていると思えないわけにはいかない。

なお、研究組織のありかた一般に関しては、Ⅲ沖縄言語研究センターの項であらためて述べる。

⑨九学会連合奄美総合調査への参加

この調査は、人文系の九つの学会の連合組織であった九学会連合が、アメリカから日本へ返還されて程ない奄美諸島の全域を対象にして行った総合的な共同調査であり、1955年から3年間に亘って真夏に行われた。日本言語学会からは、服部四郎、上村幸雄、徳川宗賢の3人が参加した。55年には上村幸雄のみ、そして56年には上村と徳川のふたり、57年は徳川と服部のふたりの参加であった。

日本言語学会のこの調査によって、奄美諸島各島の方言の特徴と、島々、そして村落の間に見られる方言の大きな違い、また沖縄の首里方言、今帰仁方言との共通性と相違点とが、初めて明らかにされて、琉球語方言学全体が一挙に進歩したのだった。

筆者は、55年夏は、名瀬市内の九学会の研究者が宿泊した宿に宿泊して、奄

美諸島各地から奄美の中心地である名瀬に移り住んだ人々を訪ね歩き、または宿舎にお越しいただいて、基本語彙を中心とする語彙の調査を行った。その成果は九学会連合の報告書に服部、上村、徳川の連名の論文として載っている。

名瀬では、名瀬生まれで名瀬方言の研究者である寺師忠夫、そして視力を失って名瀬市内で学習塾を開いておられた金久正と知己を得た。寺師忠夫は名瀬の高等学校の校長をしておられ、筆者は寺師忠夫からは、名瀬方言を調査させていただいた。金久正（1906～没年不詳）は、もと長崎におられた民俗学にも詳しい英語学者であり、音声学を熟知した方であって、加計呂麻島諸鈍のご出身であった。筆者は、お宅に伺って諸鈍方言の被調査者となっていたが、そしてこのときまで、筆者にとっては、それまでにこんなに楽で、しかも楽しい調査をしたことがなかった。なお、諸鈍方言は閉音節に富み、かつ曲線を描く独特のアクセント型をもつ方言であって、金久正の存在によって、著名な琉球語方言として知られるようになった方言である。

金久さんは視力を失われていたが、のち、ご自身で諸鈍方言の語彙の研究に取り掛かれ、筆者は、視力を失われても方言の記録ができるようにするために、カセットのテープレコオダーを購入してお送りしたりした。また、57年に奄美を調査なさった服部四郎先生に金久さんをご紹介したところ、服部・金久のお二人はたちまち意気投合して、諸鈍方言の研究に夢中になられた。このご縁で、金久さんは「奄美に生きる古代文化」（1963刀江書院）を出版された。

筆者は、2年目の56年には、主に喜界島の阿伝という集落の小学校の宿直室に九学会連合の研究者立ちと共同で宿泊した。その阿伝は、すぐれた民俗学・方言学の研究者であった岩倉一郎（1904～1943）の出身地である。そして阿伝の方言を中心に研究した彼の質の高い著作「喜界島方言集」（1941）が出版されていたので、筆者はこの独自の特徴のあるこの方言の音韻体系、そしてこの方言の文法を研究するのが学界のために有意義であると判断して、この年は、主として阿伝方言の音韻と文法の調査を行った。

阿伝での調査は阿伝ご出身の小学校長、勝常三さんと、すぐ隣の集落、花良治ご出身の郡山元正さんのお二人に来ていただいて、お二人の方言を同時に調査した。隣り合う集落であるのに、阿伝方言と花良治方言とは音韻体系を大き

く異にするのである。調査の成果は、九学会連合の機関紙「人類科学」10号（1957新生社）に「奄美大島方言の一考察—喜界島阿伝方言の文法について—」という論文として掲載されている。

(2) 諸家の作成になる日本各地の方言地図

参考のために、国立国語研究所の「日本言語地図」のほかに、諸家の作成になる日本各地の方言地図で、筆者の管見に入ったもののみを以下に列挙しておく。

- ① 藤原与一「瀬戸内海言語図巻」上下巻2冊（1974東京大学出版会）
- ② 広戸淳「中国地方五県言語地図」（1965風間書房）
- ③ グロータース・徳川宗賢・柴田武「糸魚川言語地図」（1988~1995秋山書店）（柴田武の単著となっているが、本来は共著とすべきもの）
- ④ 大橋勝男「新潟県言語地図」（1998高志書房）
- ⑤ 中本正智「図説琉球語辞典」（1981金鶏社）

(3) 全国的な方言を対象にした音声録音資料

主要なものだけを以下に列挙する。

- ⑥ 日本放送協会放送文化研究所「全国方言資料」（1959日本放送協会）
これは音声の録音がNHKに残っているか疑問である。
- ⑦ 日本放送協会「全国方言資料」全11冊（1966~1972日本放送出版協会）

何人かの国立国語研究所員で手分けして、1981版、さらにハイブリッド版と称する1999年版もある。筆者は、NHK、および監修者の柴田武、金田一春彦に依頼されて、何人かの国立国語研究所員で手分けして原稿を点検したが、文字化の正確さに問題があったものが少なくなかった。方言の録音の文字化は、録音の現場に立ち会わない限り、それをあとで訂正するのはほとんど不可能なのである。ましてその土地の方言を熟知していない限り、方言学者、音声学識者といえども、正しい聞き取りは非常に困難である。その頃のNHKの当事者には、そのことが分かっていなかったようであった。

⑧ NHK放送文化研究所「21世紀に残したいふるさと日本のことば」(2006 学習研究社)

⑨ 国立国語研究所はなしことば研究室編「方言録音資料シリーズ12冊(謄写印刷)」未刊

すべて筆者が、特定の地方に住む方言研究者に録音と文字化とを依頼して、筆者の責任で編集したものである。国立国語研究所図書館が保管してあるかどうか、筆者には不明である。録音対象方言の地点と録音担当研究者名は以下の通りである。

1 鹿児島市(上村幸雄・徳川宗賢・柴田武編、上村孝二協力)

2 都城市(宮地裕編)

3 鹿児島県川辺郡笠沙町片浦(上村孝二編)

4 岐阜県不破郡垂井町岩手(奥村三雄編)

5 高知市朝倉米田(土居重俊編)

6 秋田県男鹿郡脇本大倉(北条忠雄編)

7 鹿児島県熊毛郡屋久町宮之浦(上村孝二編)

8 高知県幡多郡大方町(土居重俊編)

9 石川県羽咋郡志雄町萩市(岩井隆盛編)

10 愛知県小牧市藤島(山田達也編)

11 京都市(上村幸雄・徳川宗賢編)

12 沖縄瀬底島(内間直仁編)

なお、方言の録音文字化資料の作成は、研究者にも、一般人にも価値のあるものであるが、予算の関係などでその作成は国立国語研究所でも細々としか実施できなかった。

⑩ 国立国語研究所資料集13「全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成(全20巻)」

これはもと、文化庁の「各地方言収集緊急調査」という事業名で国立国語研究所に委託された事業であった。この研究は国立国語研究所を監督する官庁であった文化庁のお役人が国立国語研究所で方言の録音資料の文字テキスト化があることを知って、鶴の一声で実現した事業であった。予算

は国と各都道府県とが半々ずつ負担するという方式であった。そして沖縄のみは例外的に、国80%、県20%であった。

文化庁主催のこの事業のための地方の研究者を集めた会議で、琉球大学に転職して沖縄県の責任者を務めた筆者は、文化庁側の出席者に対し、強い調子でその一方的指示について抗議したことを記憶する。その時の文化庁側の出席者には、国立国語研究所員の飯豊毅一、佐藤亮一らがいた。

国立国語研究所での「全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成（全20巻）」の編集担当者は井上文子さんである。

(4) 諸家・諸学派による言語地理学以外の琉球語方言研究

そのほとんどが筆者の良く知る、あるいは沖縄言語研究センターの活動に密接に関係のある研究者の手になるものである。

① 寺師忠夫「奄美方言の研究」謄写印刷（1956自家版）

② 寺師忠夫「奄美方言 その音韻と文法」（1985根元書房、那覇）

かつて寺師さんは、文法研究の方法を知るためのよい文献はないかと、国立国語研究に筆者を訪ねられたことがあった。このとき、筆者はよい文献はないとお答えして、次善のものとして、鈴木重幸らの「文法教育の内容と方法」一冊だけを推薦した。その結果がこの本に反映されている。また出版に際しては、面倒な方言表記の校正を高江洲頼子さん（現在、沖縄大学教授、琉球語方言学・日本語教育専攻）に引き受けていただいた。

③ 石崎公曹「石崎公曹の奄美のことわざ」（狩俣繁久・上村幸雄編（2003大阪大学情報学部）

④ 「奄美大島竜郷村瀬留方言辞典原稿」（残念ながら、未刊のままとまっている。）

筆者と石崎公曹さんとの出会いは次のようなものであった。

奄美に向かう途中、鹿児島空港で偶然、作家の国分一太郎さんとそれを見送りに来た鹿児島県教員組合の方にお会いした。そのとき、日教祖奄美支部の石崎さんを紹介いただいた。石崎さんにお会いして、奄美方言の大切さと、琉球語研究者としての筆者の多忙さゆえに研究が遅々として進ま

ないこと、そして地元の研究者の育成が必要であることを説いた。そして方言研究のための講座を開くことを石崎さんに提案した。

石崎さんはこれに応じて、教員組合所有の会場を利用しての講座の開催が可能になり、連続4日間の講座を開催することができた。講座の出席者は20人ほどで、中に名瀬在住の寺師忠夫さん、奄美のこことわざなどの著書のある民俗学者の田畑英勝さんも見えた。筆者はかつて田畑さんから名瀬方言を調査したことがあったので、それに基づいた名瀬方言の音節一覧表を作って講座のテキストとしたのであった。石崎さんは、自分は司会をするだけだといわれていたが、この講座をきっかけにその後、勤務先の名瀬の方言と、出身地の奄美大島の方言を対象にして、熱心に方言研究を推し進められたのであった。教員の組合活動が弾圧されて、国語教師だった石崎さんは苦勞されていたが、この仕事を始められたことが、石崎さんにとって生き甲斐を取り戻すこととなったのだった。石崎さんの「奄美のこことわざ」は、田畑英勝の著書「奄美のこことわざ」をもとに、方言の表記を音韻記号に変え、かつ石崎さん自身の解説を加えられたものである。

- ⑤ 金久正「加計呂麻島諸鈍方言辞典」(視力を失われたご本人自身の録音と項目草稿で、未完成のままとなっている。九学会連合奄美調査の項を参照)
- ⑥ 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子「奄美方言分類辞典上1976・下1980」(笠間書院)

学習院大学で服部四郎から指導を受けた須山さんと、その協力者の藤井美佐子さんの辛抱強い丁寧な手書きによって出来上がった本である。筆者は著者らに深い敬意を表するが、それとともに、この本は、科学研究費補助金の配分の不公平さを象徴するような本にもなっていると筆者は痛感する。なお、須山さんには、その後、沖縄言語研究センターの各地の言語地理学調査に度々参加していただいた。

- ⑦ 岡村隆博ほか著「徳之島方言二千年辞典」(改訂版2009信州大学人文学部沢木研究室内、徳之島方言の会)

岡村隆博さんは徳之島天城町浅間のご出身の方言研究者で、教員生活の最後は徳之島の伊仙中学校長。かつて日大の通信学部で柴田武の指導を受けて提出したこの方言の音韻体系についての卒業論文を材料にして柴田武は雑誌「国語学」41号（琉球方言）にこの方言の音韻体系についての論文を発表したが、奇を衒った音韻論であったため、岡村の論文の改悪としか言いようのないものとなってしまった。

この徳之島方言は、有気音と喉頭化無気音を音韻的に区別し、また2種類の中舌母音をもつ方言なので、沖縄言語研究センターの調査に参加する琉球大学の学生の音声学的訓練のために最適な方言であるため、沖縄に来ていただき、この方言の音声の授業をして頂いたことがあった。

- ⑧ 甲東哲「島のことば沖永良部島」（1987三笠出版）
- ⑨ 菊千代・高橋俊三「与論島方言辞典」（2005武蔵野書院）
- ⑩ 名嘉順一・末吉武光・高橋俊三「伊是名方言辞典（本編・索引編）」（2004伊是名村教育委員会）

ちなみに、⑨⑩の著者の一人、高橋俊三さん（沖縄国際大学）は、民間の、あるいは素人の方と協力して、その土地の方言の辞典の仕事をまとめて上げる、良心的、かつ謙虚な研究者として知られている。

- ⑪ 仲宗根政善「沖縄今帰仁方言辞典」（1983角川書店）

仲宗根政善は、かつて沖縄戦で従軍看護婦として動員された沖縄第一高女と沖縄女子師範の自分の率いる女子学生とともに戦線をさまよい、戦後は亡くなった教え子を供養する姫百合の塔を建てられて、沖縄で尊敬を集め、かつ慕われた方であった。服部四郎との関係は前述の通りである。またかつて、筆者の編集した「沖縄語辞典」を精読して、この本に沢山の書き込みをなされたが、その書き込みのある貴重な本は、現在琉球大学図書館に寄贈されていて、閲覧可能である。

私事ながら、筆者は仲宗根の招きによって琉球大学国文科の彼の後任者となった。筆者が西ドイツに滞在中に、琉球大学国文科の先生の後任を筆者に依頼する旨のお手紙をいただき、筆者は、国立国語研究所で取り組んできた「全国方言文法の対比的研究」の結果の整理と、衰退し消滅し

つつある琉球語諸方言の組織的研究とのどちらを優先すべきか非常に迷ったが、結局、琉球語研究を優先すべきだと判断したので、仲宗根先生のお誘いに応じる決心をしたのだった。

筆者はこの仲宗根先生のお誘いによる琉球大学への転職を名誉なことと感じているが、人によってはこれを「都落ち」と見做す人もいたのは興味深い。日本は、学問の世界でも、東京中心、東大中心であって、いまだ中央集権の国なのである。

⑫ 仲原善忠・外間守善の「おもろさうし辞典・総索引」(1967角川書店)

仲原善忠は戦前、成城高等学校尋常科の先生をなさっていて、たまたま筆者はそこで先生からかつての「修身」の授業を受けた。のちにそのことを申し上げると、先生は頭を搔かれた。1961年第10回太平洋学術会議がホノルルで開催された時、比嘉春潮・仲原善忠の両先生が客員研究者としてハワイ大学の同じ研究室に机を並べておられたのを思い出す。

⑬ 外間守善ほか「沖縄古語大辞典」(1995角川書店)

沖縄学の功労者としての外間守善については、解説の必要が無いと思うので、省略させていただく。

⑭ 生塩睦子「伊江島方言辞典」(1999伊江村教育委員会)

生塩さんは、長年、広島から伊江島に通って、この辞典を完成させた。伊江村は沖縄戦でこうむった被害でも有名であるが、その伊江村は生塩さんの長期の伊江島方言研究に感謝して、名誉村民に推戴している。

⑮ 下地一秋「宮古群島語辞典」(1979下地米子、那覇)

不幸にも1938年にシベリアで刑死したネフスキーのロシア語で書かれたすぐれた著作を除けば、これが唯一の宮古方言の辞典である。それゆえ、大変貴重な辞典である。また八重山方言の研究は多くあるけれども、宮古諸島は、人類学的、あるいは歴史学的にみて、日本列島の中で、非常に価値の高い地域であるにもかかわらず、宮古方言の研究は比較的少ない。それゆえ、いっそう貴重な本といえる。

⑯ 半田一郎「琉球語辞典」(1999大学書林)

この辞典に関しては「沖縄語辞典」の項を参照。

- ⑰ 前新 透の「竹富方言辞典」(2011南山舎) 八重山諸島の中の美しい小さい島、竹富島の方言の、分厚な唯一の辞典である。
- ⑱ 池間 苗「与那国ことば辞典」(1998与那国町)

(ただし、ここではネフスキーの宮古島、チェンバレンの沖縄についての辞典についての記述を省略する。)

また、平山輝男の「南島方言」に関する諸研究については、あとで触れることとする。

Ⅲ 沖縄言語研究センター (OCLS) 設立以降

(1) 筆者の西ドイツ滞在と国立国語研究所から琉球大学への転出

筆者は1974年4月から1976年3月までの二年間、国立国語研究所員の身分のまま、出張という形をとって、当時の西ドイツのルール地方ボーフム市のルール大学の東洋学研究者に、日本語講師として滞在した。妻と子の家族4人で同大学の付属施設であるゲストハウスに住んだ。当時はドイツで日本ブームの起きているか以前だったので、週2回の日本語授業の受講者は1、2名で、国立国語研究所で長期の研究計画を実行してきた筆者にとっては、勤務は非常に楽だった。やはり2年間家族同伴で滞在していた宮島達夫さんから、後任を見つけてくれという手紙をもらったのを機に、自分が後任になったのである。

筆者は以前、恩師服部四郎から米国留学を勧められたり、東京外国語大学付属のアジア・アフリカ言語文化研究センター(略称、AA研)ができたときその音声学担当者としてお誘いを受けたりした時も、母国語である日本語の研究にこだわって、国立国語研究所に留まったのであったが、もともと言語学者として、諸外国の言語・文化には常に大きな関心を持ち続けてきたので、この2年間の西ドイツ滞在の機会に恵まれたのは筆者にとって大変有難かった。滞在中、中古のVWを手に入れて、家族4人で西ドイツ国内と、ベネルックス・フランス・スイス・イタリアなど、周辺の国々を見て回った。鉄道をほとんど利用しなかったし、スペインのバルセロナ近郊とイタリアのナポリ近郊とにそ

れぞれ一週間程度滞在したとき以外は、すべて予約なしの気ままな旅であった。ちなみに、その一週間の旅行をゲストハウスの管理人に「小さな休暇ですね」と言われたが、数週間続けて休暇を取るドイツ人からはそう見えるのである。なお、教育学専攻であった父は、1935年ころのドイツのハイデルベルクとベルリンに2年間留学したが、父が持ち帰った休暇旅行用の宣伝パンフレットには一週間単位の値段しか載っていなかったのを筆者は覚えている。しかし日本では、現在でも普通の勤め人の場合、3泊4日の旅行なら、長い贅沢な休暇であり、家族揃っての一週間の海外旅行なら、なおさらである。

ドイツ滞在中は言語学の勉強を一切しなかった。筆者の時代には、幸い、それは日本にいても可能だったからである。

なお、筆者は日本列島の3言語、すなわち日本語・琉球語・アイヌ語を専門とするが、その研究には諸外国語の言語学的知識が非常に役に立つのはもちろんである。しかし筆者にとっては、この3言語の詳細で正確な言語学的情報が何よりも重要であり、欧米の言語理論ではない。まして老後の、そして病後の、寒さに弱い筆者にとっては、日本国内に居続けて、東京と沖縄とを夏と冬に住み分けている現在の生活が、もっとも恵まれた環境だと感じている。

(2) 沖縄言語研究センターの設立目的

このような研究組織を設立し、長く研究組織として維持し、発展させていくためには、研究者個人の独立性と創造性を維持しながら、研究責任と研究業績の帰属を明確化しておくこと、そして研究者相互の協力しあう関係を確立し、それを前提としながら、相互に、上下関係なく、自由、かつ建設的に批判しあえる関係を作り出すこと、研究上の知的関心の広さと理念の高さを維持すること、来るものは拒まず、去る者は追わずという、自由で開かれた研究者集団であり続けることなどが必要不可欠である。こうしたことを目標とすることが、筆者がかかわる沖縄言語研究センター（OCLS）のような自由な研究組織を維持し、発展させるために何よりも重要である、と筆者は考えて来た。筆者らが1978年に沖縄言語研究センターを設立して以来、30数年間、筆者はこのことにもっとも腐心して来た。この方針が崩れたとき、自由な研究組織は衰退せざる

を得ないからである。指導的な地位にある研究者のありかたによって、公的な研究機関ではない、このような研究組織は、衰退もするし、活動停止にも、また、自然消滅にも追い込まれる。

いっぽう、日本の学界という特殊社会は、これらの理想とは正反対のことに価値観を置く人々も少なくない。そのために、研究者、あるいは研究者集団相互が、相手を疑って信頼し合わないことがしばしば起こる。あるいは、理論ではなく、感情的に賛同、または反発する。学派ではなく、学問的派閥をなす。あるいは研究の価値を研究者の地位から判断する。これらのことは、筆者が、若いころから今日まで、日ごろの研究活動の中で、関係する学会や、身近に接したさまざまな研究者から痛感させられてきたことであった。そして筆者は、身近に少数の師から学び、多方面の文献から学び、おおくの教え子たちからも学んだが、かつ多くの反面教師たちからも学んで、研究者としてのありかたに関して、自分を律し、自分に課題を課してきたつもりである。

(3) 沖縄言語研究センター設立の経過

筆者が国立国語研究所を辞して、琉球大学法文学部国文科へ転じたのは、尊敬する仲宗根政善からのお誘いを受けたからであったが、何よりもまず、琉球語が消滅の危機にあって、日本語学者として、これに対処するのが緊急に必要であったからである。筆者が国立国語研究所で展開してきた一連の組織的な研究を中断してでも、それを優先すべきであるという判断に至ったからである。

そして日本復帰後アメリカの管理を離れて国立大学に移行した琉球大学でも、また再び沖縄県となった沖縄県庁でも、琉球列島の琉球語についての組織的な研究が全くなされていないという事情からであった。そして当時私の転職先である琉球大学法文学部国文科の教官たちも、こうしたことについては研究者としての自分の責任とは考えていた様子ではなかった。

広い分野にわたる琉球語研究の全体を、筆者がひとりで研究することは不可能であることは最初から自明のことであったので、何よりもまず、官僚機構や、内部で対立し、抗争しあう大学の学部、学科とは関係なく、長期にわたって自主的に組織的研究を実行できる研究集団を組織する必要があった。しかしその

ような集団的研究組織を立ち上げるまでには、ほぼ2年を要した。

そうして出来上がったのが沖縄言語研究センター（略称OCLS）である。

この沖縄言語研究センターは1978年に発足した民間の研究組織である。独立の建物はないが、国や大学から干渉を受けることなく、琉球語を含め、日本語、言語教育など、必要と思われる研究を集団的に、あるいは相互扶助によって推進することを目的とするが、学生への研究の指導もその大事な仕事に含まれる。

組織の代表者としての沖縄言語研究センター代表を1975年に琉球大学を退職された仲宗根政善先生にお願いし、筆者はこの組織の実質的責任者である研究運営委員長となった。そしてこれを1995年に仲宗根政善先生が亡くなられるまで勤め、それ以後は代表を務めて現在にまで及んでいる。

沖縄言語研究センターは、原則、月1回の定例研究会と、年1回の総会・公開研究会を開催している。またこれまでに、沖縄言語研究センター資料百数十冊と、沖縄言語研究センター報告数冊とを印刷・配布している。しかし、主として筆者の多忙のために、会報などの発行が途中から滞ったままとなってしまった。そして、授業をはじめとする大学の普通の充分忙しい公務を果たしながら、このような民間の研究組織を組織として維持していくのは、非力の筆者にとっては、そう簡単なことではなかった。

最初は漢那敬子、次いで謝花優子、諸喜田杉子、浜川真砂など、琉球語もしくは琉球文学を専攻して国文科を卒業した人々が、次々と財政基盤のないこの組織の多様な事務を、筆者の秘書役として引き受けてくれた。きわめて安い給料で、あるいは善意による全くの無報酬で。担当してくれた。狩俣繁久（現在、琉球大学教授）、そして高江洲頼子（現在、沖縄大学教授）、島袋幸子（現狩俣繁久夫人、琉球大学非常勤講師）もそうだった。そのあとも、仲間恵子、仲村優子、外間美奈子、月野美奈子などの国文科を卒業した若手研究者たちが、それぞれ沖縄言語研究センターの計画した重要な研究を様々な形で分担して、成し遂げた。

沖縄言語研究センターは、これらの人々の働きによって支えられて来たのであり、筆者はそのことで、これらの人々ひとりひとりに深く感謝している。

(4) 筆者の沖縄大学退職後の沖縄言語研究センター

筆者は2002年に沖縄大学を退職後、島根県出雲地方の斐川町町営のあかつきハウスに移った。それは服部二郎先生のご子息で、服部旦さん（もと大妻大学教授、古代文学、とくに出雲風土記専攻）と井上勝博さん（当時、島根県教育庁におられ、現在は島根県奥出雲町長）とのご縁で、かつ斐川町にお住いの歴史学者で出雲方言研究者の藤岡大拙さんのご紹介によったものであった。

出雲は、弥生時代の初期、北九州に次いで古い歴史を持ち、九州で力を得た勢力が、大阪湾を經由して近畿地方を制覇するまでは、近畿地方を含めた西日本全体に影響力をもった大勢力であったと筆者は見ている。いわゆる神武東征を含めて古事記・日本書紀に記された神話で出雲の神々が特別に大切にされる理由が、20世紀末の出雲地方での驚くべき大量の銅鏡と銅剣の出土によって説明可能となったからである。特異な特徴によって知られる現代の出雲方言に何らかの弥生時代の古代出雲方言の特徴が残存しているかどうかを日本語方言学者として知りたいというのが、出雲への移住を決心した動機であった。

こうして筆者は、日常の居所を沖縄から島根県斐川町あかつきハウスでの滞在を経て、2004年春、東京に移動中に過労が原因で病を得た。二月ほど東京で入院したが、その後は健康上の理由から、東京の自宅で生活せざるを得なくなった。こうした事情のため、筆者は沖縄言語研究センターの運営から実質的に遠ざからざるを得なくなってしまったのであった。

しかし、それ以降は、沖縄言語研究センターの活動は、センターが設立当初に掲げた理想から次第に変容していったように、現在の筆者の目に映っている。活動する研究者たちの範囲も狭まり、かつ研究活動の目標も理想も、以前のセンターと同じであると筆者には思えない。現在も沖縄言語研究センター代表であり続けている筆者としては、不本意ではあるが、それも、正に筆者の不徳の致すところなので、筆者としては致し方がない。

(5) 沖縄言語研究センターの行ってきた主な事業

以下に筆者がかかわってきた主な研究事業を列挙する。

(A) 琉球列島の言語の研究

この研究は、約800を超える琉球列島の伝統的な集落についての言語地理学調査である「全集落調査」（調査項目数約300である）と、重要地点数十か所の集落の方言を対象にした4分冊の調査票による「基礎語彙調査」とからなる。

「全集落調査」は十数年をかけて琉球列島全体のすべての伝統的集落、約880地点を対象にした言語地理学的調査であり、その調査は、一部補足的な調査の必要のある地点はあるが、ほぼ終えている。この調査は、沖縄諸島の場合、その多くは、名護市をはじめ、多くの沖縄県市町村の財政的な協力を得て、それら市町村の文化事業の一環として行われた。名護市の事業として沖縄本島北部、すなわち山原（ヤンバル）全体を対象にして2年間をかけて行ったのがこの調査の最初である。このとき名護市文化課の中村誠司さん（のち、名桜大学教授）、そして名護市移動図書館担当であった久志出身の宮里健一郎さんのお二人に非常にお世話になった。中村さんは名護市側のこの調査の推進者として、また宮里さんには、独特の音韻体系をもった久志集落の方言に深い愛着を持っておられたので、学生を含む調査者全員の音声学的訓練のための講師としてである。このときの調査の結果は、名護市史本編10「言語—やんばるの方言—」（2006）と題して、沖縄言語研究センターが担当した報告書として、名護市から刊行済みである。ただし沖縄言語研究センター側の研究の責任者であった筆者から見ると、その報告書のまとめ方にはいくつか小さくない難がある。筆者が沖縄から離れる間際であったので、筆者の多忙のためで、筆者の目が行き届かなかったためであり、その責任は筆者にある。

しかし、これに引き続いて行われた、山原以外の琉球列島全域他の各地域の調査に関しては、調査の都度に中間報告の形で「沖縄言語研究センター資料」として報告をしているのみで、残念ながら、最終的な報告書を刊行するには至っていないままである。

いっぽう「基礎語彙調査」の方は整理の進行が停滞したままで現在に至っており、高齢に達してしまった筆者としては、筆者の見通しの悪さが露呈していて、これもきわめて残念である。

(B) 方言研究者の育成と多数の地域方言研究者への援助

センターの言語地理学的調査は、琉球語学の入門者にとってはもちろん重要な、そして絶好の教育の場であった。調査の期間中、毎日のように開かれた調査結果の検討会では、各自が担当した調査地点の調査結果が次々に報告され、その都度筆者がそれについて批評と言語学的な解説とを行なったが、これに勝る集団的実地指導はあり得なかった。学生たちが研究の意味をより深く理解すると同時に、研究することの楽しさを味わったからである。

また、沖縄言語研究センターが研究奨励賞の制度を設けて、若手の入門的研究者を毎年顕彰したのも、研究者育成のためであった。さらに、琉球大学の法文学部の人文科学系統の学科には、筆者が在任した1995年までは大学院修士課程もなかった。国文学科を含め在職する教員たちが、いろいろと理屈を付けて大学院の設置に消極的だったため、それは地元沖縄での大学院進学を望む学生たちの意志に反し、学生のために大学院設置を強く望んでいた筆者は、周りの教員たちに対して不信の念を抱かざるを得なかった。そして大学院設置がようやく実現したのは、筆者にとって皮肉なことに、筆者が琉球大学を退職した年であった。

その間筆者は、沖縄大学で「教師のための日本語日本文学基礎講座」(1987年～1991年)と名付けた公開講座を週一回夜間に開講したが、それは、こうした学生と学部卒業生のためであった。かねてから知り合いの沖縄大学学長の新崎盛暉さんが賛同してくれ、同大学に勤めていた津波古敏子さんが全面的に協力してくれた。筆者が主要な講師であったが、その間多くの方々にも講師として協力いただいた。中でも言語学研究会の指導者である言語学者奥田靖雄、そしてまた来日中であったドイツ人の日本文学者、I. H. キルシネライト女史など、飛び抜けて優れた研究者と筆者が考えるかたを講演者として招くこともできた。

この講座のことでは、改めて新崎盛暉・津波古敏子の両氏に深く感謝する。この講座も沖縄言語研究センターの教育活動の重要な一環であった。

なお、日本における大学教育には、筆者が関係する狭い範囲の学問分野や、

関係した数校の大学に限っても、様々な深刻な問題をかかえているのが見て取れるけれども、ここでこの問題に深入りするゆとりが無い。「言語の危機と教育の危機」と題した拙論（2003沖縄大学地域研究所年報18）ほかで、一部この問題に触れてはいるが、意を尽くしていない。

(C) 琉球語音声資料（琉球大学図書館との共有）の作成

これは、「沖縄語辞典」、「沖縄今帰仁方言辞典」、「奄美方言分類辞典」などの全項目と全例文とを、方言を保持する話し手の声で、そして琉球大学工学部の音響音声学者、高良富夫の協力を得て、高音質で録音したものである。それぞれの方言の録音は、それら方言をよく知る研究者たちの協力によって行われた。うち「沖縄今帰仁方言辞典」は仲宗根政善の同郷の親友、仲里源盛さん（1908～1993）の発音を、今帰仁村出身で今帰仁方言を専攻した島袋幸子（琉球大学非常勤講師）の尽力に依っているなど、録音はそれぞれの辞典ごとに、何人かの琉球語専攻の人々の協力を得て進められた。「沖縄語辞典」は、首里出身の地名研究者で、自らが伝統的首里方言をよく保持する、久手堅憲夫さん（現在、南島地名研究センター代表）の全面的な協力を得て行われた。「奄美方言分類辞典」の場合は、その著者、長田須磨さん自身の声をこの辞典の編集協力者、須山名保子さん、そして高江洲頼子さんの尽力に依って完成した。

(D) 沖縄言語研究センターの関与したその他の研究

① 沖縄芝居の脚本化と真喜志康忠（1923～2011）

沖縄芝居とは、琉球処分のと、明治以降現代までに琉球語によって演じられてきた商業演劇である。

一方、それに対して先に述べた組踊りは、中国からの琉球王国の王を承認するために派遣される冊封使の一行を接待するために、首里王府が士族貴族の男子に演技させた歌劇風の演劇である。その脚本は、琉歌と同じ音数律をもった韻文であり、ところどころに琉歌が散りばめられている。そしてその多くは、日本本土の能と歌舞伎の演目の琉球語への翻案である。その主要な脚本は先述した伊波普猷の「琉球戯曲集」に十数編再録されて

いる。

それに対して沖縄芝居は一般民衆を観客として職業的俳優によって演じられるもので、沖縄県の各地で演じられ、娯楽としては大きな役割をもっていた。しかし和洋の映画が映画館で上映されるようになると、人々の娯楽としては、次第にそれにとって代わられていった。しかし第二次大戦以後も、沖縄の日本復帰までは、首里那覇には専門の劇場もあった。テレビの普及以後は、テレビでは中継されるようになったが、専門の劇場はなくなり、公会堂のような公的な会場でときたま上演されるだけとなった。しかも日本語の標準語の高度な普及によって、観客に伝統的な、琉球語のセリフが理解困難になったので、テレビで中継されるようになったけれども、それでも衰退の一途をたどることとなった。

それに対して組踊りの方は、古典芸能として国立組踊劇場が国の予算によって建設されて、首里王府時代の組踊りが沖縄の日本復帰以降に復活するという、沖縄芝居の衰退と比べると、何とも皮肉な結果を生んでいる。これは、国費による首里城の再建と同様に、米軍基地と日米関係とを維持するために、日本政府が沖縄県民の機嫌をとり続けねばならないことと関係する。

しかしこの点で、日本政府の沖縄芝居にたいする対応は組踊りの場合とは大きく違っている。また沖縄芝居は、知識階級からは、大衆の低俗な娯楽として低く見られていることもあった。

しかし、沖縄芝居が芸術性の低い低俗な演劇に過ぎないなどということはありません。日本全国の演劇の歴史の中でも、大変貴重な文化財なのである。

それゆえ、沖縄芝居の名優、真喜志康忠を琉球大学法文学部の国文科へ非常勤講師として数年間続いてお招きして、毎週1回の講義をお願いしたのだった。真喜志康忠は、口立ての芝居で脚本らしい脚本のなかった沖縄芝居を、国文科の狭い演習用教室で、舞台同様のセリフ回しで語り、学生の受講者たちは、全員でそれをローマ字による音韻表記と、漢字仮名交じり文の伝統的表記の両方を用いて記録し、かつそれに現代日本語訳を添え

るという形で、この講義は進行した。そして衰退する沖縄芝居の現実をよく知る真喜志康忠は、沖縄芝居の保存のために、骨を惜しまず名講義を続けた。

そして、学生の月野美奈子（現在は高校教諭、姓は上地）が、受講する学生たちの中でリーダー役を果たした。

真喜志康忠のこの授業の成果は、沖縄の新聞社から公刊する予定であったが、残念ながら新聞社側の都合で頓挫したままとなっているが、筆者としては沖縄芝居の無形文化財としての保存の事業としては、大きな成功であると見做している。

② 那覇方言研究と崎間麗進

沖縄県の中心都市である那覇市は、現在は行政的にはその東側の丘陵にある旧都、首里を含んでいるが、その首里の方言と、港湾都市として古くから沖縄の玄関口であった那覇の中心部の伝統的な方言とは、ともに沖縄中南部方言に属し、互いに類似している。しかし、アクセント、音韻、語彙の面で小さくない違いもあった。

両者は、住民の方言についての規範意識にも大きな差があり、琉球王国の首都であった伝統的な首里方言は、首里の住民の高い規範意識に支えられていて、かつ周囲からも高く見られていたが、首里の玄関口としての港湾と商業の都市である那覇の方言は、通用範囲は広くても、方言としては首里方言より低く評価されてきた。したがって、方言学的にも、それほど研究者の注目を浴びなかった。

そこで那覇方言の研究のために、伝統的那覇方言をよく記憶し、かつ那覇市の文化をよく知る崎間麗進さんを、琉球大学に非常勤講師としてお招きしたのだった。その成果の一部は「那覇の方言Ⅱ 那覇市方言記録保存調査 沖縄言語研究センター研究報告4」（1994）にまとめられている。

なお、那覇方言をよく知る那覇出身の琉球語研究者には、伊波普猷をはじめ、金城朝永、そして戦後における沖縄研究で大きな功労者である外間守善（前、法政大学教授）、そして野原三義（前、沖縄国際大学教授）ら

がいる。

③ 宮城信勇著「石垣方言辞典本文編と文法・索引篇」（2003沖縄タイムス社）の編集

この辞典は、石垣市出身の宮城信勇（ドイツ語学）がご母堂で石垣の民俗の研究者でもあった石垣文の全面的協力を得て仕上げた辞典である。同郷の加治工真市（沖縄芸術大学、鳩間島出身）、同じく同郷の波照間永吉（沖縄芸術大学）が編集に協力し、また琉球語専攻の外間美奈子（現在宜野湾記念病院、言語聴覚士）、西岡敏（沖縄国際大学）らがそれを補助した。

④ 国立国語研究所編の「沖縄語辞典」（1968）の改訂作業と久手堅憲夫

前述の「沖縄語辞典」は、出版当時の事情のため、ページ数を圧縮し、見出し語をローマ字による音韻表記のみとし、アルファベット順としたが、そのために、沖縄県民を含め、一般読者にとっては、利用しにくく、取りつきにくいものになったのは致し方なかった。

筆者は以前から、この辞典の見出し語に、音韻表記のほかに仮名表記を加えて、全体を見出しの仮名表記による50音順に配列し直す必要があると感じていた。

さらにまた、標準語の高度な普及とともに、伝統的な首里の方言を話す人がごくごく少数の老人のみとなったので、筆者は、「沖縄語辞典」で採集されなかった語彙や、最近の新語の首里方言も含めて、項目を増補して、「沖縄語辞典」を全面的に改訂する必要を痛感していた。

そこで、筆者がかねてから懇意にしている、純粹の首里出身の地名研究者、久手堅憲夫さん（南島地名研究センター代表）の全面的協力を得て、「沖縄語辞典」を全面的に改定するための作業を、これまでに長期間かけて進めてきた。

この改訂作業には、高江洲頼子（沖縄大学）さんほか、琉球大学卒業の何人かの琉球語・琉球文学の研究者たち、外間美奈子、月野美奈子、仲村

優子、仲間恵子、前城淳子、狩俣繁久らが参加して来たが、残念ながら作業はまだ道半ばで、止まったままの状態となっている。さまざまな研究に携わっている筆者に、そして上記の人々にも、その余裕がないためである。

(6) 琉球語研究の負の側面

残念なことであるが、琉球語研究者の中には自己中心的で、あるいは派閥中心で、研究業績作りのために研究を行ない、地元にも被害を与え、その弟子にも、少なからぬ悪影響や被害を及ぼす研究者も、実は少なくない。筆者はそれについては語りたくもないので、その甚だしい代表例を二人だけ挙げて置こう。故平山輝男（東京都立大学教授・国学院大学教授）と中松竹雄（もと琉球大学教育学部教授）の二人である。また名を挙げないが、専門外の知識人、マスコミや出版関係者に受けがよいが、研究者仲間では道義に反する行動をとる学者、あるいは見かけの仕事によって、研究者仲間でも評価の高い方言学、国語学分野の著名な学者もいる。

しかし、こうしたことはもちろん、日本語研究・琉球語研究の分野に限ったことではない。アカデミズムの中にいる学者に数多く見られるありふれた現象に過ぎない。

IV 現代当面する諸問題

日本における方言学と言語地理学が抱える問題は色々あるが、ここでは、論すべき問題を以下に列挙するに留める。

- (1) 欧米の言語学の理論的偏向に影響された日本の言語学の動向のもたらした問題
- (2) 国立国語研究所などの公的な言語関係研究機関のありかた、とくにその欠陥
- (3) 関連する学会、とくに①日本言語学会、②日本語学会（旧国語学会）、③日本音声学会のありかたと、その問題点
- (4) 大学、研究所などの研究機関に所属する研究者と、そうでない民間の個

別の研究者との関係、協力のありかた

(5) とくに沖縄言語研究センター (OCLS) が現在かかえている問題

(2011-11-9現在、上村幸雄)

[追記]

この原稿は、琉球大学の国際言語文化学科琉球アジア文化専攻の紀要への掲載の依頼を受けたために、筆者が目下行いつつある日本語の成立に関する長期の研究を一時中断して、2011年10月以降に執筆したものである。この文を書くために、筆者の永い研究生活の全体を振り返る機会に恵まれたことは、筆者にとっては幸運な、有難いことであったことを記しておく。

2011年11月9日搁筆。

[追記] 2

この文の草稿をまとめて読み直してみると、いろいろな不備や欠陥に気づかされた。短時間で纏める必要に迫られていたために、抜け落ちてしまったものが少なくない。簡略ながらそれについては、書名・論文名だけを以下に列挙しておきたい。(順不同)

(1)三省堂亀井孝・河野六郎・千野栄一編「世界言語概説」第4巻 (1992三省堂) 所収の「琉球列島の言語」の筆者の論文「総説」、および、須山名保子「奄美方言」、島袋幸子「沖縄北部方言」、津波古敏子「沖縄中南部方言」、狩俣繁久「宮古方言」と「八重山方言」、高橋俊三「与那国方言」と「古典琉球語」の各論文。

なお、これらは言語学大辞典セレクション「日本列島の言語」(1997三省堂)にも再録されている。

(2)服部四郎・田里友哲・上村幸雄の共同研究による、首里士族たちの移住のよってできた「ヤードゥイ (宿り) 集落」の分布に関する研究

(3)YUKIO UEMURA: The Relationship between the Dialects of Ryukyu

and the Dialects of Japan (Abstracts of Symposium Papers of Tenth Pacific Science Congress, Honolulu, Hawaii, 1961)

(4)上村幸雄「八重山方言から東北方言まで一日本語の方言形成過程について」(「宮良当壮記念論文集」所収、2000ひるぎ社、那覇)

(5)上村幸雄「21世紀の日本語」(「国文学 解釈と鑑賞」2001、1月号、至文堂)

(6)上村幸雄「日本史、世界史の中の奄美」(「現代のエスプリ」別冊、編集 松本泰丈・田畑千秋「奄美復帰50年 ヤマトとナハのはざままで」2004至文堂)

なお、この雑誌のこの号には、復帰前の奄美を描いた岡村隆博の文、奄美復帰後の沖縄に滞在した奄美人を描いた名富綾乃の文など、奄美に関する優れた省察の文章が少なくない。

(7)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究(文部省の重点領域科学研究費補助金による研究、略称ELPR、研究代表者宮岡伯人)に属する以下の研究

①沖縄言語研究センター「琉球列島の言語の研究の調査票」(ELPR2003 A4-022 津波古敏子・上村幸雄編「危機に瀕した沖縄諸島方言の緊急調査研究」所収)

② YUKIO UEMURA: *translated by Wayne P. Lawrence: The Ryukyuan Language*
(Endangered Languages of the Pacific Rim, ELPR, 2003 A4-018; Project Leader: Miyaoka, Osahito)

(8)石崎公曹「奄美大島本島方言の音節(音声)について」(奄美郷土研究会報、第34号、1994)

なお、筆者の音声学・音韻論、また音声の指導に関する著作については、その多くが広い分野にわたり、かつ長期に及ぶ研究テーマなので、ここでは扱い兼ねる。別にまとめて述べる機会を得たいと思っている。ただし、論文名だけならば、雑誌「国文学・解釈と鑑賞」(2007,7月号至文堂)のp24~p27に「上村幸雄 分野別の主要著作目録」として掲げてある。

2011-12-22深夜擱筆(沖縄にて)

あとがき

前城淳子さんには、この稿の校正でご面倒をかけたばかりでなく、崎間麗進さんに関する、私の記憶ちがいによる誤りを指摘していただくなど、内容上のことでもお世話になった。記して、感謝の意をあらわす。(2012年2月14日)